十代集抄書
宗祇注
伊地知文庫
文庫20
278

文庫20
278

千代集抄上

後撰

降雪乃之の乃衣しらきつゝ春来てけりと鶯ぞなる

しらきとは悔未を指てよめる乃之乃衣とい西小

さゝて如き如衣なる事

言乃葉乃萩乃幾度かきふるゝ美葉ぞ誰と云て愛

萩乃やけりゝ小若葉付き用歌

竹らく夜衣ふ世ゞ嘗乃哭ゝ多き鶯い世ゝ主し

鶯いとゝ鶯寝世ゝ主すなる事

伊地知氏書冊
滋岡庫

花山院道俗遂て一つける時
山ゐいとなる女を砂の方へのぞて折て
ゐたいと思ひ梅をおんす
折まいらぐそ小ぼけるそなり三世の佛小花事の
ふさとい事ゆさを花を折て西ハ迷やと云也
歌事乃ゝきゝ忘まてゝ花ゝ事とゝ小ゝ乃哉
花てゝ小ゝてゝ和い乃事ゝ歌時いてゝあいせ〻と思
ど咲ゐ忘てゝいるなゝ
八重葉もゝ乃ゝ小忘けゝまい花みてゆ無いて云ちす

八重葉ゝとい思ひけゝき事ゝ
いひそめ昔乃有かきつる女はまゝそかゝこゝけま
いひちゝとい実初ゝゝゝ思ゝ乃ゝをかゝをゝ小な
ゝゝていひそゝゝゝものかゝさと連けゝゝ
ゝ小かゝるゝ氏人ゝ也ゝ連ゝかけてゝ頼ゝあぶてゝ小若と
ゝ氏人ゝ詰人の事ゝ蓑ゝゝ若とい達ゝゝ若乃ゝ
第なまい頼とゝ

次乃夜乃ゝ琴引と聞て
短松乃実ゝまゝ小云砂の峯ゝ松風哈かゝゝて

松風小琴を付るいとの中や高砂の松風といい
世小と琴ゆく〳〵
数なり奴歌ゝ山の時なこの葉かしの恵きこゝろや
この葉かしの寿いさはやうめとなるとゝ
かゝきの峯とひこて鳴けいの宿る月そ
龍いすの事やすいの山てさまや
影いかゝゝの袖小つみて是とゝよとやかゝゝ
惜衣素や
ゆゝかとゝかしれ物いの世ゝの事ゝ龍る思ひけり

此歌の意ハ頃るや
の中の方をゝき捨てゝ
此夏中ハ火に入世ゝやゝき捨てゝ
し身をゝ世とゝ世ゝ
六月二有ゝ
織女ハ天河原をゝ
天河原ハ七夕ゝ七瀬の
や板の六月ゝ夕ハ
逢事ハ七夕つゆ小ひゝ

あゝハ歌ハ毎年の夏
ゝ世ゝ
ゝ捨てゝ
ゝ心なす
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

七夕まつりはまことに心やすく有けるよはいとも
なき事と思えねとも心なき
七夕の天のこゝろを今祝ふ人のつましなるん
はいとも言ふ家小書さるる人の事
天河岩こすはの立ぬはゝ秋の七日の夕べ氏
乙川越しき頼にそ渡ぬる達つなるに神はぬきつ
天河小ゝこゝろ渡はし
きをせんふと
家とく物やかしきこゝろ
第乃中とはいはしし
松乃ほ小風の立つとまろせてこゝ竜田姫と秋引ら
松のほを西方へいしなの根乃字と音とも字
ひもとる竜田ひめとは秋を領する神や
秋大輔（完家ノチカノ人）つまさつるる歌ける意小侍ける歌
乃葉小ゝてはらしける
山里のさびしき事は歌乃葉のなひくとあそ思やこゝ
山里小歌はし
あけてしまるるたをを
袖を同の身とそ

まるゝこゝろハ田とまるる心やそ田つゝハ袖のぬれまる
四ツ田とゆるそゝ清とゝ物を言やゝ
秋の夜の月の新しこゝのまゝ
素よりも蓋葉衣とゝ有今の衣ハ蓋葉のかゝるゝ
秋のよハ人と三清やそつゝ
かきなすハ琴とハ言ハ琴とハ
花落月ハ入こゝやいき事をとゝ
第ハ羽ハ花咲ハ實成る物すれと落ハ花咲實なりすと
誰こけ恋ハ明ハ月そつる商の尾花の末と恋ハ
家ハ述懐ハ
天可ハ恋こゝ
三河ハ百の渡と付こ月の山こ
ふけハ
百の山ハ付
秋風ハ
親の
ける人
神無月ハ
家ハ述懐ハ百ハ渡ハ
天可ハ恋こゝ清こ月山こ清ハ恋ハ付ハ
三河ハ百の渡と付こ月の山こ百と可付歌ハ
ふけハ百の山ハ付
秋風ハ百ハ錦ハ
こゝ
親の歌ハ
ける人ハ
神無月ハ

冬の月はゆく雲と時雨の降まいとるとのみ思
ひ玉の白と詠まれて有りし小降つ心雪へさらぬ白山
白と詠よ一白まと詠と云心うの白山いつも白けまを
梅の小枝つ雪と春と寄りしめのちつけ小花とそみる
めちまけ一見の夏位とちらしつけい物のはかとを
面とうまぬ小人とを雪載まとうん春の夢
か小人とるよ夢のやう小をる心やはまあなく
美にとなく妄想小みるる心
水ちい乃ひなくすまる河しまと人とをふみるう月

此とと神の言小取なすとこの事と詩の神小とを心や
しまとと人とをとをしてとを心なす里
是引の山下ちけくは言葉の言葉の家とをしい
葉のはいまるやいさなく物と寄る様やそしと家
方に喩や葉のことはまるる子とを心なす里
あやしきいとふはる心載いふてい思ひやせへき
此ちやしくい不書とを心なす里不書と書こあ年くと
よめ里とを人と思りと思へとを人を言くなるけや
乃書の一世くを言が里乃駒とこ載

君と賞翫して上﨟なりしとか里館無とや
思無とみめし人は有ときくこし一言の葉はまちかけ無
家と思無とこし人は世にあるときけとも其人みえはい
里好きは詞に跡なりしとや
清けきは玉なす好男のまとひきいみなりける物にいはねなけり
女の人に髪かきてよこし里のこと筆をかく清け
きよき玉なす好男なりしはみかきこしこせぬとや
思ふ人の恋しく夢に逢事とてかゝる時のまはとよみし
夜々夢に逢事とかゝる時をしつかにかりやとや

津国のなにはにてまくおしこそすゝ焼火の下にこかれし
秀句の歌や名にこそ世事の情けきは思ひをよし人に
あやしきぬとこ里すゑとはすりぬるの事や
小山田の苗代水のこぬよと心のやのそひはうたし
世のいひとはやに柱を立て水を辺里の田にかゝるとこや
物きける女に蝉のかげとまこそはつかすとて
これをこよ人も泣きぬる恋にかく袖とすゝまなかれるなと
人もすさめぬよに人とてしあはせぬとこ心やつの身の果も
蝉のかゝらんとなすんと塊るや

遠事のかゝる事をもて君こゝろ思心の遠ほりて
思心のこゝろをいかゝとゝる心なり
大海小水をはらひ舟のはやき人小舟をもて
海小水なるき故陸地の序歌や舟の早くとゝ
言砂の松とみるとゝ事なるこゝろとゝぬやけり
女のこゝろ小こゝろ心の有とゝすゝて頼心なり
なるれる頼心の白波行けるけ思ひまする舟なる事
人の歌小重きこゝろ思ひ其人の心はけき故小海
こゝろいなとゝかる心なり

秋の田のかりほとゝふとゝ苫をあらみわが衣手は露に濡れつゝ
思ひ出てゝ詠ゝる歌ゝ
蓮葉のこゝはまをなきこゝろふとゝ物有ひとゝとゝ
物とゝ思ひてゝ水茎に有ひとゝ
見の付るゝ蓮の葉小付るとゝ
ひゝく霜の暁おきゝと思ふ
霜の暁人のかゝるゝ衣うしなせ
ゝとゝ衣ま也小かの事
人ほる心のゝまゝきる者とゝ

人ほるとゝ〻す事恐乃くまい西乃屋る心すま
逢こゝりき方とゝ言る〻事ゝ思ひとゝ
ゝりけきこゝりと未と言ふ小叔すてゝある物と思ふる
よゝき事ふゝと未とよゝきゝ小叔すする
冬ゝ乃思ひ君ふ君ふ月小咲奴思ひ世ゝとゝ乃ふ重ゝりけり

雜

君ふ垣ゝ乃家夜と目さけふ座ふゝ常住逢ゝきゝ
逢月とまゝきゝ社まなふ重ふけてゝ乃ゝす割る人とつる人
人とゝ世ふふ乃ふ重ふ小月ゝ柾乃綱世ゝ世ゝ
限すき思ひ乃綱乃ふゝゝゝ乃ふゝゝゝ

蓮

世ゝ思乃はなす思ゝとゝ思ふてゝまゝき乃はるゝ
事ゝいふゝてゝゝ心ゝする

蓮乃はゝゝとゝ思ゝ　はゝゝとゝ
はゝす葉乃はゝゝ人と思ふん世ふゝ重ゝ乃ゝふゝ
こゝゝと重ゝと花ゝ言ゝ乃ふ里蓮葉と花ゝ
雪家方と重ゝふ雪ふ数ふゝ家とはゝすゝ乃ふゝ
ゝ河乃滝乃いとゝゝゝふゝ人ゝまゝとふる
滝乃いとゝすゝゝ事何ゝ世乃いとゝすゝゝ壹と付
小山田乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人の娘の亜へ何のおやかてを思ひ星さけるを亜へ親の
きけまい小けるを男の方へ
相坂の中つけ小時三里の道のきこうすれ日をい事
夕小思へとうて云けとも夫こと人のゆきを
ほ時よりも里急よい家事とうも里
日ゝしの都うと重きけぬくるさ山とと里いやとき
日ゝしの都よい家事とうも里はやとき
いまとう西とも分世山ものの春日愛と力里小をかし
山野山小住世捨人の事や山野の侯よ修行の感度や

雲ゐちの乃ほるけきうとの室とよいうなるほの吹てつけん
都小ほまと、きこ、壹国へ下まるを男の二と女い実
こ有と都の女うこけまいるる
限なる男の四とまくはるの二ゝ
心とまくるの四よ四と重すとう秀句やまくるの二ゝ
ものとけいの里と若う侍新小ますかけいる
玉うしの方のまるの里吹風の寒くいこ、まし男を
家方能ゝいたうしものひまゝ人世物とうも里
数ゝ如方とうも荷世こ志野山まるけること思ふ

なけきこるとゝ[illegible]とゝろ荷とゝもあり言ひこゝろ
家ゝ[illegible]と高さ〳〵ひとゝ[illegible]る心なり

かゝるとき小童の神の[illegible]けるとゝ[illegible]
清門とゝ女小奴一の者と[illegible]すて物ゝけると其
あるの男のゝ[illegible]けるやゝ
一の小恨なりて笛行の一[illegible]男心のり
恨けり人の笛と吹小想夫恋とゝ吹けるよあり
みなの人とかゝみせけりし水無瀬河喜屋にて先ゝけり
人のかゝ文とゝ[illegible]ると心ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

かゝすゝとゝとゝろ[illegible]一[illegible]
事なり[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
山河のゝとゝ小のゝきく[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
里身とはゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝと男心ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
馬の内侍とゝ女房の男小付て実中(下)ける時ゝ[illegible]
せらとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
山賀の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
山賀一人小布とゝ[illegible]

日ごとの山ちとくさよ重ねの末毎ふとそちこ世
日ごとの山名所やつき夜ひまと拾ふ好業の
てる光みてしやくとや
まき三ツ奴人とをけ四束ちふ家と行て元信の里けも
たたたい敦敏の父や敦敏の三ふるをまき束に
らさない結ひさとやとも
ほとをす離とをしぬ世をすまとを間切と出とを合
うとをす離とるき世とるしとをしる者いさき
立と歌とを
拾遺
春立とをはるふやみ吉野の山と離てけさいみゆを毎

拾遺

此歌ハ公任の歌と九品ふ弱る小上品上　小入拾
るとはるはるにやとい春立とを思ひ世やと忘有春
とを待と山のをやるるとも心と有
春とをれい先そちをいそ
石上者ハ貴ふ里の松初やるとを毎春ちをしけるとを
沢水小蛙ひくや山吹の一ほちをけやを庭にみゆらん
層小山吹と付山吹小蛙と可付用歌や
蛙とちい四里ひけしをちるしかを百とを比
ちをの四里とを百とを思やをひをいとを立事
やかを入をとをとをけとをる歌や百千百千百里百

秋

け時る二つハともに面白かりし

いつくしき草の枕と鈴虫ハあはれとこそも思ひなりけれ

鈴虫の草の枕ハ思ひなりけるよハ思ひなしと下知する心なり

彦風に志賀山こえにけりつれなくもなく女とも紅葉なりけれ

名ときけハ昔なからの山なれと忍ふハ秋ハ色因なりけり

昔なからよハ昔のまゝと思ひ忍ふとも秋ハ恋のあハれなるよし

別

東路の末のしら雲ハ都の月と思ひなしやる

東へ下りける人に忘れなとのいひすてゝよめり　此歌也

雑

東路といふ句に二つしると付るなり

朝日さしけひのしるしにやあけぬれと人しらん

日のかしといふ思ひやすくなすと歌よみ侍る是も朝詞

つひにしと明白なるなり

夕されハ衣手寒しわきもこかきぬたの音ハはやこの世

まきともなハ家いともと心やさき洗ひ衣よハぬひ合せる

衣とこそ余る唐の衣小川なとの句に衣を送る

なりけし

なすれあとこせるハあひて世の中の事ハかつ

なりしきとハ忘るゝ人の事や三とせよハ小泉三月

とめかとの人といふ三事あるかへりや

限なき浅の雪に世をいとひて人此忘といふなるや有らん

雪むもひて霜と雪と本語有此歌ハ家の定し

て人の里下にいなるとふ里下の字霜の字とかく置く里

浮世小伊勢物語

世の人のかなしき事なかるべき事
をとうとうとふかき事
難波江の芦の花毛の穂みだれ
出歌に相坂の関は駒迄
とうとうとも書有
三途河渡る三途河とは
三途世河とは死て也道小三途河
小三途河のはとは死人の衣とは
を渡る小さ川を桜町を渡る三途河小
衣とは川小さ川

かゝる事柳とうとうより柳より出柳と云伝小なるべし事
か柳色々
か柳色々と書小有物と云事を
又伝の伝小伝の書及の衣
の衣や柳みどりなる色の衣
うゝ白き箱の侍けるとめてこの世の人と侍ける
時箱のうち侍けるかゝの人のよの殺さんとしけるよ
老はてゝ雷の山にいゝけと霜と霜と書ひとふける
霜と書ひと鈴と書ひとふける
身の三途をしる事と新て順也歌
行ゝ舟ノ内ヤ
ゆゝ書
舟の家

哀いまに志ほめしと　ゆまの釣舟ハ　よらはへてし
引しきハ物ハ思ひ　下畧之
大将はなし侍て　東三条太政大臣
山河の之明志て留　名人もしこかぬきし小（於イ）
西重わけて（大内ハ八雲名心）志律豊水筆也　神無月　しすきまに
こちら又こ
榊葉のかをかくはしとめくれハ八千代人を囲ぬ世重ける
かくはしとは香りしきやそちら人諸人の事也
まも山のひとの室とする事と神のまつれはまこてまる
まも山よいそこはくの人と云心なり重
逢見ても糸さしきまね心のいく旅とほてゝ喜の無つき

夢よ重ほか小物のさ世す可と云用歌なり重
玉鉾のよるちもそ人ハゆけこそと時のますもさこ国ハ無き
毒道と云用歌也
家なるちてをとかしき心哉思ハぬ人ハなすふか恵しこ
りとかしきと云詞の用歌也人のよなすきハ思ハぬ人をと
思ハりとかりしきと云しと云なり重
夜草の志けきに生る丸こほけまろ丸ほよいよへぬらん
序歌也丸こすけまろとまけうら丸こすけよいかなき世
志らゆハぬ野への秋はさ風吹ハ萎しかく物とも無
萎しかくと云ハこかくか也
かくれはつかけは水よりも水の面こく數なりぬ旁もいは世無

うつみまくよりていぬ心ゝ事此かつくゝとゝ詞ゆゑよく
ゝゝ事里下向いも水小数〻ゝ事とはゝなきい思ぬ
人と思ゝけり心ゝ事
清園の雛遊の事に作るゝこゝゝ、宮もてゝ事く
雛遊のこゝゝと云事有ゝそれをこゝゝゝゝ事
雅人のかゝゝ事おほひ作ゝゝ人と思ひゝゝ
作るゝゝまゝ中に量のまゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人と思ゝゝゝゝ事ゝゝゝゝゝゝゝ
つゝかゝる道の道駒心行ゝ者ゝゝゝ
せゝゝ者ゝゝる馬ゝゝゝゝゝゝゝ
道事のけきのゝゝゝゝ獨ゝ事ゝ生はけ

新のきゝ事ゝ木に取ゝゝ特の祝のまを振小取ゝゝり
鹿島ゝゝまゝまの神のつゝゝゝゝ家ゝ小ゝゝゝ
近に小まゝまゝ明神まゝゝゝゝゝ動請事ゝ
祈る神ゝ近はるまゝまゝ祭ゝゝゝ人のゝゝ数ゝ事
引人ゝゝゝ思ゝ榊ゝいまゝゝゝゝゝゝゝゝ
一度小官の二行の事ゝゝ人のゝ事ゝゝゝゝ矢三つ
蔵人ゝゝ所小侍ひけゝゝ人ゝゝひをゝゝ使小事ゝ
ゝゝ云小侍ゝゝゝゝゝゝゝ侍ゝゝ事ゝゝ
使ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
女のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の縁語や魚のうろことこいや
塩と里の海人関小さらし玉と床とかるやとぬれ袖
珊の関とこい氷の水とこそ世をるとを玉と床と藻の宗
塩竈のみるめ又玉と床とよい天角の人のぬる床とを
かられとのかれ笠とそそ
悲心の歌やのかれ裏のかれ笠えひいの鼓
君こそ世世世世の神そうきはるすきとを何つる舞
強の神とうの神や女と男の神と此神の連理のすると
八の連別人を待回とふ事こせとうきかはし
回こせとこせとこすの事や月迫と迫
三のよややと三ぬ心となるぬ世のうきいけ世

七宝の名は菖蒲にて死る時もるあやめと三ぬと
い善悪と三ぬと忘やうぬ世よいはや死の事やきよの花の事
ふら衣はて捨るなるる可きふもるる水そなるる
ふら衣よ忘の時はきるいろの事や後て捨る中陸をこ
後拾遺

いふ小袖て、ちる朝小三事そきの事とを回とふ
世の相常住の心なる、いの世とて昨日とを回こるの
日とと回と小事住の義となるる迫
ふ野に春のけきに霞めと世ふるる言の下
世すは世るとふこすは心なる
春なるて五月雨きに離は江の葉の若葉に山ほる白雪

春なくてよいは花なくても心なき里
壱つ咲き遠里野一乃百千鳥ハすくなき春にや侍ぬ
百千鳥よの万鳥や春も多なる里なりハ爲きけれ
亭子院親王繪合し侍ける時
し乃花咲る盛ハしら波乃竜田河尼乃ゐせきとそみる
繪ハ立田河なきる所ヘ又し乃花と波にくゝるなる里
ふきけ世昔乃ひともなき中にうけ出るハ秋乃夜の月
すゝきけ世よハ人乃集る心なる里虫乃ふりてとゝも同書也
荻風もや吹く口そゝる事ありてなる里秋そなりし
おき風ハよく荻乃風ハ悪き詞也荻風松の風なりまたは
山里乃賤乃松かきひまと行しかいでて吹こかへし風

賤乃松墻よ賤が栖乃垣やひまとゆしとよハあらぬる垣也
山家乃霞とを
主人もなき荒なき乃かけにたる霞きへ音せなりけり
荒やなよハ水邊乃ほま里にハいてる時ハ付になき里
山里又霞なども可付用歟や
いかは里なる雪なき里ハ忘れかと里ぬなよ
忘れる為ぬなよの椿詞や常し神代にこそ乃ちよし忘
里にをも引物なりをれと數て君ると云心なり
君か代ハ限も知らし玉椿二たひ色ハかはるとも
椿ハ八千年乃齢乃物也二度あらたまりしハ一萬六千年
なり君か代是よりもかきりなしと云里

三河なる八つ橋のかたはつまなくて二と重にそ縄ちけれ
三河なる家のものは家は袖の三河またまた人はちひさけとも心
秋まる門すまた世はさひてまし心の松はいつあるへき
心の松とは家心のうちに人をまつといふ人の云ぬ松や
門まつる松は人の言物や
東や乃かやか言ふりみるれはいまや月日のめくりと云まにて
思有ぬやか下に由こりまる人は月日せ切とをしぬよや
かひなきは秋人いまて逢事のけるるるをのうらやけり
けるかそるをよは云るをのつしと香句に云まま
危ふく云とゆるそて乃丸はのまる成とかる物思ふらるを
此歌も序詞の九橋の丸とつけるあまをるなとは家をとあや

いろ心かいつ世物のかいなやの云ふく調つきかけはく
かつ世物かいはやといかはしとはけるる調や種は
きますなき家にいてゝまきかる物や
春の野にはる思ひの未まて何まいつまとかあるらん世
妻のとも焼火と乃思ひはの事をある此火をいつま
なりゆると永か云ぬ世をよや
いけ水は天河せはなる世を空なる月のかけにみゆるら
空なる月や乃底にうゆるは我か天河よやつくらんよや
岩かきぬまと云物語をはてまして
引捨る岩垣ぬまのあやめ草思ひ云ですをに逢哉
此物語そ人にいふ世事をかずよすらんは思ひ云やるよや

赤染衛門うらむる事侍けるとかやいひける
和田屋といふ人のいる所は余波ひらくといひけるなる世
子の字は海の名やはらふと云ふて根の公みそわかこ
里は余波とは波のさいさきにて静まりぬる事と人と思ふの
思ひきや衣の後は三世里ふて三世まで行と思ふ事ありしは
賀茂神主の三代六位にて居る事とぞ此云てよめる
や六位の衣は緑のきぬなり行とか云ふは姿の時の事や
緑葉なる桂の中に住吉の松のひとり青葉やけり
住吉の神主は六位賀茂の神主は五位にて交ける時の歌
物思の思ひ出とはいはでいて浅茅の末と世は果にけり
物思ふ世の時なり事にも浅茅か末と世は早すりにけりと

と云ふ浅茅は思草とも云ふ
猿叫ける声は山にいふまで栗のなりける人となし
山家生へよるや猿叫すると山居もまぬ小猿の中より出
心はまだ人のまだいひるとも見え世の詞也
住吉にて　経信卿
ときかけつ衣の玉は住よしの神さひ渡る松のこすゑそ
よきかけつとは説法の事や衣の玉とは法花の事や松の
梢にいふ花の事は諸法実相すれとなり
花のちりもと下葉にきはまりて木の下とふりや散るらんとぞ
親のよまる詠歌と云すまでも花の葉は詩歌の事なり
小倉の家に住ける比雨の降ける日蓑かる人の侍けれは

山吹の枝をおりて人に侍けり心とえたる事なる
又の日山吹の心をえたる事なるに人に侍る
事ゝ侍りけり

七重八重花はさけども山吹の実ゝつ
ゝ
歌をは花さけども実のなきを思ふ事なるに
実のなきは書る事
維摩経小世界は芭蕉のうらと云心を
此吹は先やゝ色なる葉にいとゝ袖を露けき
身躰破安　如風芭蕉
云ふ衣はたゝぬいふは頃りきけなるものふはこう世
実方の中将親ゝ人に女の一所へ通ひけるを母聞て娘

を国母にまゐけり母実方をきゝて三日の祝ゝ餅飯
を実方まゐらせけるいとゝ母ゝ母ゝ娘をうらみ
云事又注事母にはゝこと云事を娘事ゝ事

第合ー侍ける
まけかるゝはゝしけなる朝顔ゝ餞第ゝ云ふ
云ふ第ゝ合まける人の歌
思ひ出る事ゝ朝の事ゝ第合まける人の歌
朝ゝ人ゝ小り書てやゝ云時ゝ時ゝ
はゝゝゝと思ひける我ゝ云ふ世の家のゝと世ゝ
儒者の家ゝめゝとる女ゝ世ゝ
ちゝゝゝ入ゝゝ

金葉

ちりのこる春のきはみとうち山河の岩まゝにおちかゝるやうに世
をすてゝこと志
新なるひき蛙のなくなるこゑ
花かきの小いとしと思ひ
人の家と思ふ白しい藤の花白しい藤の花
かゝる春の月のこゝろ
郭公の鳴くこゑ
人もなきやいを竹をこゝろ
賤のゐる世をこゝろ
一つの花ばさうけの賤のやどいやまさりけり
あやめ草家のまゝにうきこゝろ

いのやめの生るゝきこゝろ家身のうきこゝろ
を菖蒲のゝきこゝろ
いのや矢筆とのゝ小生る物なる
山城の宇野の菖蒲の五歌なる里の国を
社なるこゝろの根と社なるこゝろ
五月雨の如なるの岩かき水こゝろ
さみだれこゝろ
さゝなこゝろ日数ふけり東やの
東やこゝろいのつるの事にあ
和とすゝこゝろ
六となるき家をけるなる

金葉

文月やこの花うちはの月の雲にかくれぬ
有りとの有歌千里あり万の姿と花の音に教へ
萬代と君を思へき七夕の月の
りあいの空よい初秋の空の事や
うれはるあるあり刷のなるこしや花の
天人の名のるうまを花のうつと露けるん
をのうまうつ秋の書けり山里の
人のこそ秋のるよう心千里
夕ぞ秋門田の稲なることつまこそ
ほのうる心や空をはるかん空の
梅津の里の経信の

拭

月代まるやなと付
もう書や月のうまるいの月の
のうのうのうの用歌
山風や葉の里の神のうるん月のうの向
葉守の神よい反木の葉とこけるの神や葉の神
頃〻白葉をちる世い神や嵐ふるんと
なよ竹のとうの袖をうまさの如き思いそ
竹風や白うの題の歌や白と向て袖をうまこうい
雪のうまうの秋しまうこけしうの
つうの秋よいおの上ふるの祝の世の寒けるよの
道理ふて裏けるよやうの月いかこの年待て編うの

ほうをさまりかこいかいけうしかいつの方とうふ是うけ置
是の事の驚と思ふるとをり歌と思ふこと何曼をこと置
中〳〵小霜の〳〵いきをいかこと〇こうやをつの毛衣さまう世
霜をしいさこい雪うるか中〳〵寒や
君の世い天の〇こと〇の〇こと〇こと重いひそめてきくしくしかい
天こと〇の〇こるい春日大明神の御事とう世
墨ちすくこうきうこうの朝日こい君そはつて萬代まてこい
天ない日月ぬまや豊さうつうるよいけうこいさこうつうるや
神つまま雪ぬのきしをとりうこ百文ないこ毎まこうこ載
嬉小すうこうしる人雪ぬの都こ文通いこんはつひとうし
と雪まこうこうよいまつひつの事や

うれしく思ひいとすきをまれうひ小こいいな世うるう
小宵をうこ辛のかこうこ重杉をこうこまけきは
いやここかつこをいな世こうこと三重
なうこ河袖のぬきこうけてこう世こうなすき恵とすぶ
袖の杉ぬまい家の字世こうすきや家恵と堂一所ぬく恵こと
はこうこ浦の百の恵こるけまいこ恵いる君をすしはす載
恵いる君をこうすこと君を世小こうこうれること恵や
つ恵ぬかこうす明小こ言の葉のこうぬうこい言人とな
為の羽小かきこる文おいぬの鳥小あはきい文字
ひをゆるをうれこつこて恵かく物なすひ事有
芦かきにひまつかこうこの物世つまこ三ゆるわる恵

物思つまきよい物むまいり
けくいかけきこ
君をいつ夜も夏の神と逢事のかつ逢から
つ夜も夏の神よいひと言をとつくる神やけかいすす
むかいのあきよをこいねふよりも
是引の山のまふくこ子をきるのつきいひ夏をあるやけ
まこくたつまるよい心のまこい木とのこ子をのる
やかくきよいか夏木と云心なの夏と八かくき夏なの夏
清園のまるやく人をあるの河君をよをくきせいを夏くる
世まるやとないの夏を人をあくいそのるを夏をを
けをとやあるの河清國小育

笠取の山小世をるの方に有夏八ふるやをてるの家心
笠を山に炭やくを焼すをと家胸の思ひ小喩
逢事いかく社かるの磯ひるの社夏かすとかをくん
敬ひくのよいか夏小いそひるのとを一般を水を逢八い
そに夏をすをつひをよるの夏
有事八かく野小ふい来ぬ夏八ふかりの夏八をけくを
る野に特の主歌をす夏に思の夏とるの夏思の陸
思かりくゆくるを事
花をを君なるくのなの夏けりあ紙ちをの君の心や
なるいるを八を夏やはくを君るふ心にくく八深きを夏
かこを夏をくく人の社ぬとを事や

逢事をうの石神の連歌さいかうの句を動き侍る
石神いこうこう家心はけ里和よ
数なく如身をとら河の はるといなる海のと西とる
はるといるとふ おとめる心や物小はなるふ
ちなる物なく世とい、ちなる一
かくはを恵のやまいをとけ毒とりいかけさけて書物表
くつりと物をとるけ里い敬なを読里りけさけて家とる
あやきとるる里けりと聞る其ことのふるとふ
あやきさるいやきやるいとするいとはけるる心や
るるとと秋の月を山と松しかるる琴のもの月のかひはけるし
秋の月を山とい中宮へはるそし女房の宮まつふまつり

こ琴引はるうるるて博意に逢てうあ里
特ちさこそハそ里のるるかるる一やる
そ里の高きちのはいやるそ帰る物や春の裡くはけきなり
いるいい世を山田いるこうかきいハ三はるまるいしなすき世を
かき梁の一りと言詞や家分世小ろし逢てうあ里
はやき漸小ろ如つ里そし水車はとしき世小めると
水車小漸小ゆる物や家とき世をめるいかなすきと
新いるまるつ代うの裏小をきるとこ、はる哉
男の捨う里はる女の一所小る代衣とをきはるを敬小と
二世里はるふるはるをきるとこ敬心なる
こいなく世小ちきるうきる多なる思いしるの思誰の思世

をとなの宮（白さかす）と奉りけるとぞ聞こえ
かの歌をとゝまいみじきと侍りけるいとあり
がたくなまめかしなどあるまゝにいかにもいとあはれ
人のをとゝ（伯母）の有けるを（扶持）ちいる人のをとゝにてけるとき
うやまり書かけるを二度の道をこゝろ
二人同時なるこゝろ人々に人の名情をとゝやゝ
なきかけふけるたかとあり物をとゝやゝまゝ
唐土事小人々つゝ小劔をかけうを真志をこゝ出
家人をこゝ事いなるやさやゝまゝかとふとゝ心
身のきを思ひしきけい冬の衣と帯ぬいなるやけり
思ひのゆこいい冬の衣も後のこゝ

心をこゝ世をい捨ゝまゝ
幻の姿よい者姿や身を捨後裏こゝ皆の人々ゝ
ゝ頼世人の心いあるゝやゝこゝ悔き振ふとるかは
都小女のきけるこゝ万人小つをこゝ捨ゝ
思ひやる心のをこゝいなるけをあゝ
まゝの歌々世事や都なる母のかゝりけるい都ゝ母
難波江の芦つゝ根つゝ三けゝ心とゆゝぬ母ゝ
道の芦根のこけきをこゝ心のこゝまゝとゝ
むけいけこゝ塵とゝ親々ゝ
塵とゝさゝよい親のなを憐心なりけこゝ
いゝつゝ月をつをこゝなるゝ月やけ

今日をまつよりの限りの日をいまなんと待や
かくはかりこちてふ此の吹をこちてふ里の名さすひかさす哉
こちこちとこちふなる里こちとこちふを影かいうてしきや
歳まつや剱の六月なまこいかのとなるろるん
世獄の縄をこてふめ里剱のきけ字を木に東白世里
茅の葉にうてい忘う里国ときいこてかいちてかる露けき
病をうく重て野小かて人の時を待ける人のうるや

詞花

おかの三ちの唐山寄ちちけてこう吹うする春風そ吹
きこてるまつの歌や
数の博かきのなきはるとと誰ぬきうけし歳てうそと

詞花

寄里のこくきよの大内の跡の事や称のみとりをい誰
そめけるこの真如の心をよ
はるく人となき数の庭の面い花ちまてこを考へる里けし
庭をはくなよふら用歌や
七夕い衣いかさて
ゆしくやこんよい、まくしきや
天河ここきる言や主なはるの
七夕ときりの詞をよこきる里とうる里
神かきふるとなこい朝国とゆるまて白いきくる
数国いはなきそ人なる逃とと神のにこる逃い神の
恵にて夕まて白の里をよ
ゆしを両方へかるうる里
むまるる国のをはまて成
ゆいるる里くるのるるん
おい里とすん

節分の夜清玉まるをとら
ゆきまくらうらうそ雪の鶴の子世へいまきよらと如き
人世の人生れる時祝てうの里山はきよいとはきへの事
なる鶴のるといいしていつの里
法華の神人神のひとうきに行とて度生のる世
何の人神ちい生なる神となるをうの里
心うへ世ひの神やはの里をこるけきとて如君哉
ゆの神ちいうの神やかうちをうの神い物
るに心をうへゆの神や作のんこけ如わと
頼をけやう岩小世うう滝河のうしてと来に逢世とを母
宗徳院の讃岐の松山へなるし時みこ逢の

うし〳〵に生ひしし時
芋夫うう山のけうい世うをあちるかをけり
田上の田家にてうの心量夫なるうう二田と付
宮世のかううなるうを心
二の世にいみと申ます梅の死ち里〳〵なるむ事を哥
梅死にうを二人うのかうに情りを新里
か里そめのうき世のやをとかき分こう〳〵まりとい世の恩
家ふき世の間にまるに月思いて猫のとうやむな里
自をうう量をうてう運かを人の里ふけるは
君に待人世のるに量をうてき鶏の鳴ふ
かやに奉公の辛労の世とも意

百年の花小中書こき世世にて人の夢にて有けり
花小中書こき世世にて人の夢にて有けり
色を捨て後こそと人の色欲の事をみ社なりと人の
色を捨て後こそと人の色欲の事をみ社なりと人の
千載集
春の日の光のどけき世に春とて立ぬけり
春の日の光のどけき世に春とて立ぬけり
あるべの石大社国に有春の日の光
あるべの石大社国に有春の日の光
道とても入野の道の草の道の草
道とても入野の道の草の道の草
入野原哥
入野原哥
九重小さけるをもらせる花こき紫の雲に有けり
九重小さけるをもらせる花こき紫の雲に有けり
帝王の御宮の歌小必紫の雲に
帝王の御宮の歌小必紫の雲に
花はいかきの花とのをや見ます
花はいかきの花とのをや見ます

〜の花の賤の塩の煙の立ぬるとて賤かきの
蓑笠こる日の神の〜の〜の部とすると
蓑笠こる日の神の〜の〜の部とすると
根をやーなよ人の石養方不如養手
根をやーなよ人の石養方不如養手
神山の有小なる有の引ましてと重ねいる
神山の有小なる有の引ましてと重ねいる
賀茂の神人の夫て雨降ける
賀茂の神人の夫て雨降ける
宮城の宮城の下露小の有の
宮城の宮城の下露小の有の
里に石有こしの有る
里に石有こしの有る
する国の松とつきて
する国の松とつきて
松の中事
松の中事

ふい与と十五日の事や月夜にて星のとゝ
はや漕川をさかのぼるに舟底二つ世めていくるき
みとさかのぼるふい水のさゝ波と云舟の引事大切の事や
七夕は天津しを吹秋風小やそ舟をこぎ出
たつしをふい天人の衣つい
ふ八十ケ曽の唐の船あるを
もしりて今宵はまや七夕の秋に塵つまるさらん
七日の夜は七夕あつい秋小ちまなるを
山置いさしりまけまこかる
山のふしの蜩小あるは一日吹こをすしの色いろ
田とつの山置にて鹿つ吹を聞てふと待ける

さをしかなく長い野小聞ゆ
田とに鹿付き用歌や
秋ものを乃ゝ伝葉に
秋にを野のあちなを可
ゆまれし山ゝるはきて立
山る付てふい山かける
聞て鹿をこの
霜の色乃雞波乃音乃
今にいゝ小ゝ
紀元明て考て
さしきゝ多なふ

歌を乃きを乃色の衣立
付用歌や霜とてへ
山の羽音にるこの世ける
歌乃事や夕暮なる羽音と
明の素小ゝ吹なを
乃ゝ蔵きかる聞乃なる乃ひろて
ゝ乃ゝ世とゝ小蔵乃雪

[illegible]

遍照寺にて山を遍照寺と云心をよそに侍けるはしけいけの寺ときしなまし心有て物いけかしの遍照寺とい度に山せよ遍いある寺や

ふかきしるなすゝの山をとゝ度せいおのゝをあるゝ志賀の海せいかゝとゝ思ふかきの白物しなゝの山い志賀の海せいかゝとゝ思ふかきの白物しい長柄の山を降ふいさなゝゝ波のとゝとゝ

あゝはの山を出し桜の割ちこい白なる琴のたるゝ部

王昭君胡国へ引ける時馬上にて琴をひきをらしなる

そしを琴とゝあ重琴い絃の物の惣名や

織女しあゝはかゝ雅楽の神しゝゝゝ露けるけり

雅楽の神といゝゝの事や

稽後綱釣ふかゝ家い桂川里ゝ世を侍けるい動

瑞竹離のかゝゝをゝつし富なる恋八月三里事を少ゝ多き

ゝまゝきの桂ゝいかゝとゝ里ゝゝ桂かゝの神木とゝこ

あさて通す東し女のかや里ゝゝ乃ゝ三ゝきゝ乃ひこをゝ世載

東や乃あさ木の乃ゝ主ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ通ゝかゝん

ゝゝ木ゝ桂ゝゝ恋き木の事ゝゝゝき木ゝゝ物ゝゝ

ゝゝゝ通きゝゝ雅木の事ゝ里

函ゝとにゝ三ゝ世ゝゝゝゝ山塚乃ゝを世室ゝ新移する

奥ゝ乃人のゝをゝさゝ里ゝゝ三ゝ世ゝゝゝゝ人ゝ逢

ゝゝ自ゝ浮物語ゝ者歌ゝな

さをとめかつあまた田の尻にいる民も身のためにはよ袖もぬらめ

身の為を業とかくるやうなるもすゝめいふにかなふ事や

しかあるに世すゝむる紛なるはかくすゝめに叶ひけれ

しはおよひ神楽しめの衣裳や日新しの昔の事やあるいは

小孫よい紛を世に残してあるいは孫ひとよみ事ニ有

手ほやす、はきゝの宮此様にはあひそ草の材やける

いつきの宮とは賀茂の斎院のありしまでは一所をと云ふ

昨日までみたらし河に世を清徳三ヶのうらなと云ふかうけり

賀茂の神人は書るて三ヶの浦には住ける時の歌や　不審有

人しれぬ大内山の山もりはこかくれてのみ月をみるかな

頼政位をのそまれしふる事ゆるされ時此哥や

ほ里あらしはまの月よめ室さして思ひしまゝ崎に雪降にけれ

月よめとは月をまてや雪は月の事や

いなほは三津をなまりにしてよせ世との云の月をみゆらん

或人云代学仏しよるやとよいふ昌代の事や

作つくにて此と世も身をまもとうしてみまし吉野の花は散らし

吉野のちくは世を乃らぬ一所なるとしとも心にかなはす

思ひやるこそふもあまりけるらしひの桃かうける心ゆるされと

儒者の家此千代にもる媛裏のうちを新てよまひりにこ餘

いよは千代に餘る心ゆこのひとの文道の事や

いふるしひまかく駒を引とめて昔になるみちとこる秘世

隙の駒は光陰や光の移りゆくことをやるぬ事や

田上の山里に住侍けるに此頃はしけ〳〵しう降ける雪の
まさきの戸をとを山おろしふきとをせてうちしをれたる袖哉
山路を先の子にて袖の雪ゆゑや田上木戸可付
何のすゝ〳〵ぬをしろ川きりの於なを苔何事ぞ世小生らめ
観身岸額離根草と云詩の心やあすゝ子如なる世生れん
石間青苔のきりき世の民にいろ間ぶつる私小墨染の袖
延喜の御代に衣をぬき給ひし事以思ひ出せしよりゆゑ
ゆゑ松ゝのしゝの山は事ぞ
物の名ふかき人〳〵を事を
榊葉にもみちとせ〳〵と神かきふるみとせる哉
神かきにふをぬきをあくすることかゝるとを

同〳〵山里住〳〵
やと山里はこゝろ住を水となす世かつ田田に名の人ゆゑ世
かはまこゝろの遠列や万葉集にうゝ田のやゆゑなゝ
はらはなすこゝろ者ひしけなきゝ山と
こゝひる玉のやはこの根ゆゑと者の人ゆゑなるゆゑゝゝ
玉の人ゝ玉の人ゝ毎に心をゝ世玉小
はゝゝゝゝ夕ゝゝゝきゝゝ夕に胸のさけゝ事や
何ゝの小咒の文字と歌の上にいとゝきて十首ゝをゝる所奥に書侍ゝ
かゝいをけゝ文字に面ゝとのゝ仏の歌ゝゝを助けゝゝ
ゝゝゝのやゝゝゝゝ
あゝゝの観音をゝ奉ゝ

みるまゝ小夜ちどおぼつかき里なる思ひ家にいつるひる思ひは
あるを観音へ七日参りしに少し猶やとゝ下旬の日あり
とき里まうらいい心持やうし
うしと答ひとうふ
法の花ふ身をなりけらんゝ
うまゝ神のちひとを
熊野へまいる道めゝ
君をいつる祈りをゝ
しけ雷の神ふ
清幸ひる言根のこい雲晴
日吉の祭の事を
新古今
みゝ野山と霧ゝ雪の中里に置に春いさこい里
雪の中小をきゝ
嵐吹きゝのなき
柳の陰ゝ水ふ
山賤の
野分ゝ
野ゝの吹
猪ゝ

鹿の入る里
つの門の里田植
の里田の稲やよいまり里
石はしる初瀬の河の岩ばしり
山ゐの菊の下もみぢ
菊の水い飲ば若やく物なる里
朽ぬ世ぬ真なる里
賓の中将の歌を西行のまねる歌
墓所ら尼堂小よりまるる
神小白衣ぬ
はる雨小宮家の世ぬ墓所なる里

月とい
衣のそよ親の
玉の
小野
墓の葉の里
山里に
風寒を
世の濱小
破なる
いそなる
いま海士

時の庵所なる冬ぬ春月
ふきる衣中陰の時ぬ歌
ときゆ小露小
の
賤の山里に衣
山里に
歌
小
時衣
水の
浦小
海士

唉うけ衣ハ奴まつる衣也今ハ献衣乃奴まつる義也
誰そ此の三輪乃檜はらも知らなくに心乃杉乃我身なりける
女乃杉乃實をつゝミて男乃そへむとおもひける時よめる
心乃杉とハ心いきなりと云心なり
庭に生る夕かけ草乃下露や暮を待まの泪なるらん
夕かけ草とハ夕乃草まつるや草の名にあらす
こゝろをも人もかよひ乃山にハさよ更ぬれハ松風乃ふく
たのめつゝいかけまし夜更なれハ侍と云心也 乃山ハ近江國や
きぬめことも無つきけ事と実にてよそ世中乃夢になしてよ
たゝりく思ひしそれは里と実にや夢になりて
よといふ事にハ忌まふと云心也

長月乃比野宮にて前栽しけゝに
色乃ハ野乃女人はなる花さへ秋にあへるかなる
神人はなる花なまハ時雨にあへるかまゝにやうつて
草も時雨にハ何へる物や堪忍せさる心なり
久方乃天津乙女が夏衣には雲井にさらす布乃滝
天津乙女とは天津山女が衣には布川乃滝とさらすんと云心也
天川かの天つき事無はとてら乃橋はやらすや
いかゝせんとの昔長伯殿と云 浮木に乗て天川乃水と
尋事なき菜乃い天河に七夕にハ乞
今ハ家松乃枝に小竹乃かきにつゝき物を昔かへ袖
閨居乃志とよめりつゝとはこゝろんと云也

三ぬ人のそなきはけこなる世まふかの人社などいふ世を
そなきこる人はよりてやいきせるとつまいかまこうとや
なるの社よい家をいこなる世まなる
ふけやの高推の高の人のやれいれのみきこいこそるける
香推い祇園ふまるまいい幡の高まなる世ふるる
神をはつ里中未の事ハ世尊木とつける
月さはるみ里河ふいけこをおいすまる山和井の袖
山のの社よい神田の時の衣懸ハ白波や
かの野の松の下紅葉水柴来ふ神の高の一のけ世
若家ハ人の貴い天下とふ世家いふふこと

を記く歌や

寄寞の苔の岩戸の三ますけきに深の自ハ人ハ世なき
寂寞の山のよい静まる事や辰の自い感深の事や
紫の雲路小さそよ界の高の小ふき世をはふ掌ハ松風
峯の蓋い注人ハ紫雲来迎を待こふる世ふ高ハ蓋ハ隠来
迎の時音楽をなすや
深き夜の高ふつ高いをとせぬい浮世を離の出ふやける
不輩蓋隠の高をとふる高やふき世を高ふこふふき世を捨
ふ家ハ周慶捨身の高ふ
ふき家の一業ふをといそふし男ひなふけを津つふふなを
不偷盗戒の心ハ津田宿ハ涙いはす人なる

新勅撰

あすまの月とかすみて空にいとはるる春の霞はなほ空にいとはるる

月と花春はいづくも何事も和歌にしかぬ春の霞

霞ひとり春を知りて先立つるいくとせ

久安六百首宮内卿院百首歌奉一時

松風の音もまれなる春の夕霞八重しきをしき屋の内

うぐひすの鳴くこゑ小うちの春の霞かすかに春の水

だくとよ水しろくなるとともに

守覺法親王家五十首よみ侍りし

春の夜の月小黄やいづるうつの宮小夕梅

雛鳥の音ふる津の宮の梅

うぐひす侍ぬ思いつるの雛鳥の事を思ふ

ふる花ふつの山せ夕ふるもあるそや世を重ね

一百中夕ともあるそや世を

六月の空といはゝ夕立の力なるゝと野の上

六月暑き夕立修楯の長流き心ゆるゝと野の夫

吉野河の岸はしやく鳴神の

ちりぬる花の散まるよ岸と白けき白波を花吟

久方のいとの月も明なくに夜ふく吹く秋の風

岩戸の関とて天の戸明ると雲とて岩戸の関と雲

榊森の月の出ると

榊森の卯山のかけ秋風そ

榊森の雲の雲の月の雲の雲の雲

[illegible]の里羽の[illegible]を[illegible]と[illegible]清[illegible]ふ[illegible]けり誠

[illegible]の里小の橋より河の西方の岩屋の里二の[illegible]す[illegible]

の[illegible]里を[illegible]と[illegible]家と[illegible]清水[illegible]と[illegible]清[illegible]

第[illegible]の露ふ[illegible]の玉章に軒端の[illegible]木つけ[illegible]

更科や[illegible]捨やまに[illegible]

[illegible]の山小[illegible]と清の月と[illegible]

[illegible]の森の木葉も[illegible]

片[illegible]

[illegible]や[illegible]神なし山の[illegible]

神備山小なる[illegible]葉と雪[illegible]

[illegible]雪の[illegible]里[illegible]松[illegible]

石清水臨時祭

[illegible]女[illegible]衣[illegible]

衣に[illegible]

竹の大[illegible]

[illegible]大宮人の[illegible]

[illegible]紋行[illegible]

亭々院宮滝御覽[illegible]臨時[illegible]

[illegible]

ひ[illegible]

ひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

大[illegible]

都に[illegible]

大島乃ゆくいはんとすれども舟路乃難儀乃ことなり

奇宮部行乃鈴屋乃頂宮にて振乃

いそのかみ ふるのやしろ乃ものを振る

都乃ものを奇文乃ものの道にいる鈴山乃ものや乃業可付

天爰六年日本記竟宴歌国書之

天乃下いるこゝろはすべらぎすべらぎ

育天代用閑乃事国家之作法乃事

同児屋根乃

和なるゝ 恵日乃ひかりまばゆきにものゝ忘れ

春日山乃里乃下ゝらかをくこゝろ乃ものぬるゝ

春日に康森付

かけて いろ乃真神山乃やまとゝ人とゝ何乃ものゝかはゝ

賀茂乃祭乃あるひを今ゝうるとゝ乃ものゝとゝ

いまつるやゝ乃ゝ山かゝ小者

雷乃ゝ光ばゝ乃ゝ小をとつ望てゝ

雷神系ゝ乃ゝ乃ゝ神人乃ゝ神ゝ乃ゝ小

かゝ乃ゝ乃ゝ山乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

六乃輪とはゝ乃ゝ三世乃佛ゝ小ゝ世ゝ

鍋ゝ乃ゝ乃ゝ六乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

輪廻乃ゝ乃ゝ佛ゝ鍋ゝ乃ゝ輪廻乃ゝ

みゝ乃ゝ二乃ゝ何ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

佛ゝ衆生乃ゝ願ゝ佛ゝ乃ゝ育ゝ乃ゝ物ゝ

と衆生済度の法あるまつぶ
〳〵しい事なり重月とかきるふたまいつきいつ空
十四夜の月を井いこと〳〵十五夜園城寺を
墨をもつてかきあらはすさまを西とうしすめうをなし
大園鏡智の宮園の字を天台宗の観園園不離背面
ちをしい警の字を振るいるをしゆくゆきの死を家まいとおもつて
はを死の作しるを心や大家はを死の悟りけるの心や
首を捨るとかけるの作の業はそよいはを出引を
佛八十度海行の日に虎小尊と書て結ける時の事と
と為と捨る衣らけるの作のとをを
天王寺西門にて

さはをなく入日をうてと思ふ誠ちかしを西入かとやけを
元亨の西門八橋系の東門小仰ふとや
ゆめる海士の生涯の塩路小なをて月をつるすをしい
と待て晴震〳〵を月なを月を見と八元来なきを恋小を重
をつまゆきあの月を世をかをてめこと八故や西をそを
小三蓮と逢ふを自し逢とを重しゆきの月を七月初めの心や
下にをいそを乃思事なをしく尾を八月小いまをと
野小思事小を可付
明ねとをを三ふを白三の春ふまを松いまを何のかをしい
ふを小夜明をふく乃を大明事や水を逢にあるを
春をすを西と乃をやのひをを八遠事をを乃事を生ける

逢事ハ乃葉ハ思葉乃事也君としてハ君とこそすれ
六乃をとハ乃まりめとハ衣ハ鳥羽し女子か袖やかまはす
六乃をとハ和琴乃事也六すちなれハ琴乃をとハ合
せてよむ物なりハよまめとよめり
思ひもなき世ハみ名をすて軒端乃松もうらめし
新いの罡の松と待乃字にそへ軒端乃松ハ面白き哥也一
行幸ハまさへ大将乃事也八重の事也…つけ侍る
つきまさりやはらひ乃つきとさきて席の端階にて此橋
使乃もとにハ名のと侍るや端階ハ橋侍る哥ハ西撰右の句や
はかなきる乃跡とハなりよとつすまるしハあられたとみよ
人ハ親乃物と書そなにあてつるとてよめる

袈裟と

蓮葉乃玉となれと思ふにも袖ぬるまするけさ乃露哉
極楽に往生する金ハ蓮葉を坐とし佛ハ蓮花をまつ座と
かなしけれハけふ迄りしと思ひてハあまたと孫か山乃ぬ水
山乃井の水にて家をたろかけとこそ昔とこそやる
あなしにハ此橋乃うや白きの雪ふまうへなきハ立つ世
何すらハ海邊乃嵐をといふて浦なと思ひて吹ぬや
物名二乃まはこそやろ

續後撰

春乃内小春立ぬよや吉野乃霞かゝまる峯乃しら雲
霞乃かゝまるハあらす雨かすまかす世に気色なるとこそ

山吹の花ふかせるゝ河なかの
是河名所に家是に喩まいに
名和殿ふかい八月十五夜歌合に野菊花
ちく露と思ひかけよ春日野に
名和とゝ句に春日野に秋
秋の月なるめ〳〵て老世と山の端ちらくかゝるきにしを里
月の実行と老の姿や家とゝや小人さ方とやと観する心や
水ぐきの岩の苔に千年をはや夜宮なるん
水堂の岡に千年をはやり重いかりうる所と思や
河井河の三〳〵とかけて三〳〵とみちの入いるもやはまと
名業の入いるゝ本業と舟筏ふことうや

世の河岩なとい井の花ふかて長夜あす明るかれ
世は川の岩ゆ井の花の両方へ通る音と根と
ゝ世なるの入ゝ通ゝて岩とゝ光ゝ世明はゝ
日神月神天の岩戸ゝ開蓋育一時天下ゝやとゝて
夜書と分ゝ住吉の明神竜宮ゝ屋敷と気ゝ明るを知
雪山大士結草者解とゝる心と
うゝ通草の解と数ゝのひゝき世ふゝぬ雪の山人
天ゝ通の虫と雪の山人と申や雪の山に草の解可
谷ゝ水かけ草の入ゝ露ゝ三ゝ重ぬ引ひなるるん
水ゝけ草ゝ名かけなる草ゝ草の名ふわす
岩そゝくみかけふゝ井の入ゝの今ゝや神とゝ世ゝん

いとそこなくけい岩そこく水かけとゐや岩根いとき水
ゐ[illegible]きの衣はのらき音ゆくき根やそこらゆゑ動ひるん
蔦城神い見所めて衣ゐ通しや蔦城神の詩ゐ音
岩根のるゆ集そこぬ一朋ゐひき蔦城の神
河とゐ音ゐ音のいい音のそこ集一三めゆひゐる岩ゆ波
河とゐ神の字に敷ゐ波とゐめゆひゐるとゐ音
桂河ゐこの花ゆかけゆ咲ゐ例を作ゐ面ゐき
岩の花とゐこて桂河と度一高とき子例とこ入て音
衣と寒と国の山ゐまのとゆゐゆるゆこゐゆ思ひたゐ
振ゐこて秋き衣宅けきにいこなゆそ武庫の山波
音ゐ南い清国ゐ秋き音衣ゐい秋ゐ世の事や

佐田河瀬ゐ一ゐ一ゐ音かゐ一岩ゐはを景ゐや世
瀬ゐの白糸ゐ白浪の事や世ゐ入てゐるゐゐ岩ゐ世ゐ

續古今

名ゐ山ゐ天の山ゐ雪井ゐ山ゐ春ゐ
天ゐ字ゐ山ゐ山ゐ山ゐ雪の霞ゐ音
思ひみゐ山ゐ花ゐ光ゐ山ゐ
雲の高い雲ゐ雲ゐ雲ゐ風堂ゐ千顆萬顆玉
さゐゐい瀧ゐ水のゐ世ゐ
竹の葉ゐ引ゐ音ゐ一衣の
竹ゐ年ゐ上ゐ音ゐ
長久二年八月松尾社ゐ行幸待けゐ

箒花をかざしさつ野乃篠のうへに(?)侍るを近衛
殿さこに住侍けるすさの事ありしかは侍るはいとゞ侍る
しらまほしけきときこゆる花落りたるくらき野辺(?)
さつ野小さくすゝき事多を可付
所も二ツ亀山乃仙洞にて人々千首歌よませ侍し小
鏡わたし乃山の塩竈河乃瀬小なまよる蓋へ寄けさ
嵐山の塩竈河は大内(ぬえ)中にも此歌よ里大内(ねか)河と付侍里
神かやいすゞのいそ乃あやとよる乃はなの花乃とけき
五十鈴河伊勢にあ里破乃宮いらみ(?)合せそ乃
菖乃出里乃頭(?)傳有
西乃しをやわかさら(?)塩(?)住吉乃神

穂居海乃塩名なる里

四条院御時八十嶋乃祭使乃事承侍るに事違ひたる
を侍る里けるは其使住吉小まかりて歌読侍
此使にまかり侍るを思ひつけてよみ侍るに
御族世々末とをくにも住吉乃神小おかをつかまつりては
其の海乃祭の使世々にけ神もあはれに哉
こに見ひ里をかたてゝすいあし乃とまや雪乃たちと
山王七社乃うちに客人権現と申は加賀乃白山にて侍る由也
榊葉乃白(?)桜の世にこそありけれ(?)乃向にある
白(?)村よ里大内乃神楽乃榊をよみ侍りて
よい榊小こそとはまつる(?)

維摩経小世界如水泡と事なり
面白き事ハ度々聞かるれども
うかりさらい水の泡の事ぞ
曉の鐘の音聞こえそうしけ里今浮世の明ぬと思ふ
人毎にまもる浮世といふ長世の夢ぞとも里
かそへ里八十市の里しとと、千あまり里の面そへにいる
人世百とせ千とと数う物ぞと里の里八千まで里う事ぞ

天台大師と

とふきく泉のまうまいたりの水の今うしそめけ里
天台山に大師のまう面ぞ寺と玉泉寺と事ぞ
号屋保昌郡丹後に事下けり和泉或郡思頃と面こぼれ
ゆきゆすきう面りきい山りの山

和泉或郡保昌と事下り下ぬると思ふ山丹後に有
稼人ぞとすく事に里関吹こゆ次ぞ世
か、りまぬ関吹こゆと今なあ里ぞ
かけつい神いきの(備ふる)家小月ぞ里明の世と
出ぬけの世と事ぬ神に有る月いとに住ぬのとよ
唐の国すとと日本ぞ稼の音散ぬ
唐の国の日本に世きて唐国ぞ高僧伝稼
まる三ぬ如来の滝の夕連ぬ三ぬ今ぞ滝さすまて
滝さすの稼の詞昔い面里今と里ぬ稼人の滝と事ぬ
塩釜に住ぬ月ぬ明ぬ世住ぬ
塩釜ぞ世きに稼と事ぬ衣と明世と思侍ふ

こまの乃ひまゝ　白

人乃乃こゝ乃乃かけ小ゆ　ゆ乃ゝ乃心のゝゝしこゝろやとてゆ

ゆ　白俊興心に思ひぬよゝ　ゆ乃ゝ乃と思ふに思ひ思ふこと

小車に錦乃ひとゝとゝきうけてあまゝゝ袖をれて一衣乃を

小車乃綿ゝ細乃ゝ愛小きてゝ里衣簡姫の歌小

つゝせこゝゝきゝゆゆゆとゆゝきゝを結て

おゝゝ滝水乃ゝいゝゝ事乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ里

伊勢物ゝゝゝゝ河ゆゝの事や

花山院御事ゝけゝ御簡恋ゝ宮乃歌小

あゝゝき栖小あゝゝゝゝ花ゝ袖むゝ乃歌や歌ゝき

栖の心小ゆゝ歌ゝゝゝゝ

霧小ゝゝゝゝゝゝゝゝ鶏ゝゝ岩田乃小野小歌ゝ小重

岩田乃小野小雪ゝゝゝゝゝゝゝ可付

隻乃ゝゝゝゝゝゝ面白ゝゝ片岩に移ゝ

交ゝけ小すゝ秋小歌ゝゝ面白ゝゝ片岩に移ゝ

備中國場河ゝゝ山寺にて

山田ゝゝゝゝゝ秋はゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山田ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ乃海苔にゝゝゝ枝乃ゝゝ

江海乃苔小ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ周文王狩ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

日本ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

曇ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

繼躰天皇御宇に成給いまして御子なし
百濟の尾と成て及の淺茅原意に
百濟大和淺茅生
相坂の関のあしたの霧はらいそそ居る苔を見るとて
蟬丸の歌なり　相坂嶺は
茅の葦と月とおぼしいて如雪と
月の山の上に新しき雪とつる
伊勢にいたて清る玉敷重ねつる
うつれる玉のいとうしろめたし
玉櫛の笥に掛ぬ玉敷の
動なき岩に小松を寄る海松の
るとい海松と書なり

神備の山は今の石清水いひそめ
岩清水よい都の八幡と申
はるかに見、清る清水なる石清水
いひそめ、清水なる石清水
神なひ山大和

堀河院百首抄出

春部

三室山こしのや春の来ぬるらん滝の下水岩こゝ[illegible]

三室山小雪の下水付

玉はゝき春の初なる白梅の[illegible]

玉はゝき春の初なる白梅の事

玉篇ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

東路の末曽の[illegible]

末曽ハ信濃国ニ無[illegible]

[illegible]

序の歌ハ[illegible]

入すゝる音聞いらるゝと毒帝

春きたるかゝ[illegible]

かゝ[illegible]

[illegible]

三里の思後の[illegible]

[illegible]

春ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春むかへ岩のうへにかすみこめて雪をうつす岩そこ春むかへ
浮蔵のもとにいまは春にまいけり哉
春の野にとまりて行かへるべきこゝろもしらぬ
春の野をせゝらぎとしるしの水根をはるの事は喜もとしらぬ
賤なるこの物なれたる東の二束の事は
はるのかすみ立ぬるとなるきぬ蔵いつかるにしなんとすれ
ぬすびとしの生ふるかとこゝろにいと物やかとゝ莉蘭の事なる
深山木の陰の下の三ツ蔵の蔵りしいつまとも知人となし
深山木のかけの蔵に宝をしこゝろ人なりとゝ下の
心いと人ふ三ツ如家身をいつ
ゝぬこゝろ神ゝ春の夜の月の三ツの此面をこゝ

呼なるいとおしく立帰道はつけし種育けふるかな
家とうむなと思やさの母事と云里
本はへまてかてぬ人こそ物なすく頼まん
りつかへ本契る人小婦達心や知い永く頼んと
わきとなる門田に植るより色の苗代水といふこしの
ひきとなるわらいとそ苗代おそ年しうまとん
いとかうる田なまいふかなとはんてかの心や
賤かるの苗代水とひきくしく家何とそいそくなるん
寿の奇や寿道有人のいきかるくく急心や
そろい生る野沢の荒田ちかしいそけるくしかの稲
そろいとの田し生る田し生る思むろいまきかくそのを所や

歳暮生れる宵の つ田草うし鶴の色に染らん
誰そむうとう字れるやふ吋つ里浅茅生の宿小道
田すうしまくく
つひ如里い花の散小宵ものそ山小草とはまんとを思
山い茎住とう秀句なる里
花うつそます里そうける杜若誰ゝをそ衣にするん
うまをかきはるる咲うらいさなら衣の文のやゝや
さすい里やしてとう心なる里
吼吹い岩かき沿の花はるる波の色うそ西色うそ里けり
かきはるる字とうるうそ小東なうる里
俗るの集く水沿の かきはるる是とそ集の面そやん

墻とゝ宗い敢なゝて傷るとゝよめる事水面に浪に水小さ
まぬ(ぬ)や谷の入いとゝい谷の入さまぬ
濱松の三ほゝ小かゝる方なるをみゝ人さゝを傷(ら)事をけ
三ほゝゝい下枝や下枝の藤あいかゝ重飛なゝしぬ
紫の糸ゝ事かゝる方の花ゝの春面ゝ回ゝ方ひかけ
糸ゝ事ゝるかゝ回ゝ方ゝるとよめる事
紫の蓋の面の雲の根の紫雲(紫)の雲の明月の雲かゝる
明月ゝ秋ゝ雲ゝ紫雲の事ぬ
やゝかゝ(ゝ)の谷小白ゝ山吹はゝ事ゝ方ゝ花の色ゝ
金ゝ事ゝ小かゝる物なゝはゝ事ゝ知ぬとよめる事
裏部

ゝるはゝ方の衣の谷ゝかゝ(ゝ)とゝ小なゝ紅しきぬ
つゝゝみとゝ木めゝて海ゝる衣や回ゝけゝ彗中の交世ぬ
人ゝ方ゝる衣ぬ
ゝ方の花ゝ神の方ひのゝきとゝけゝとゝ方ゝけゝ(ゝ)ゝ
脇(ヒロキ)ゝ神小ゝ事ゝいぬ方事ぬゝゝ小ゝ方指ゝ三沖
小けゝゝゝ白きゝゝなゝ
日かけ山ゝゝ方ひ方ゝ方ゝゝ方ゝゝゝ
蓑ゝ神方里ゝ方ゝゝ方ゝゝ方ゝゝ
ゝゝ里蓑ゝ日かけ方ゝ
神山方ゝ方蓑ゝゝゝ里ゝゝ方ゝ方ゝ小ゝゝ
蓑ゝゝゝゝ蓑ゝ蓑ゝ

くさ草をかはゝかるなる里
高砂なる袖をしぼるの又月雨わけてをきなく山郭公
みをしるかをにおもはるる物なるいわけてをきぬるとよ
なるわけをいふかるる心なる里
あるをかむ賤かつきの小時なるなくとをつかしきの里
何をなる里をとの何をとをみをるかをやをの入い
やしを所小なくとを色いやはるをよ
ちををい宿小はくまの何やをの軒の雫しをを思
はくまの何やをい君を里宿小はくをを又月雨の軒
なる里をきをあやをの根のはをなるとを心や
たをしいる袖小をるの何やをまを袖小をけるをや人をを小せむ
ををしいる心をを書をを男やの入ををしい女をを小袖なる男や

めはゝしき君なるものゝ菖蒲草引ををきものの物の名なる誠
初をを君と寝をるの衣殿とを心やをを君小可比へを寝をを
ををきをの入ををやをを引をの菖蒲草を引合をけをけをを
逢あやををるいをけををるの引合をとをを里
逢事の入ををを小をけをの何やををまををの入まををを
逢事の入小をを小をを嘆をを心やを昨りまををを小思ゝ
をををを小ををのはをを接ををなる誠
を猫ををる田小をを小をを秋角の入をを事ををををきを
をる里をを事の入ををきをを入をを田をを里小をり
小山小田に人ををむををををををるをしををりををををを里をを入をを
をををを小何をををををををる物をを里をを里をををををを

了ぬ玉苗とゝ七女ゝ子ゝ乃ゝ曲なる紫ゝ貴ゝ賢ゝ元ゝ習ゝて里ゝ
道とゝ思ゝて乃ゝ松と重ぬ一八富山ゝ乃ゝ煙ゝ
ゝて乃ゝ決事ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ八富山と云義有
事ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ八富山とゝ
又月ゝ乃ゝ乃ゝ乃

さゝぬふの方の世をいとはせきこゆる人の世せきこゆる
所世きとゝの世ときとゝの世や
いなき人ゝ永そといけふ云仁ゝかゝ里大ゝぬ駿人やそるに
いるきいゆきの人の世俗ふいなやきと數ゝとゝる世や
ちひちめとけり里ぬ元を長る心乃中人葉遠人とゝる
こひちふけり里ぬふとゝ流せとこひちとゝふ里流ゝ里
出ゝ流ひ西如心中人はちすはゝ里ふとゝる世
はやなゝゝふ舟漕ふ世ゝ乃ゝ中ゝ海ゝ人道ゝ世ゝまゝひ
ゝやなゝゝゝいゝゝ人ふゝゝ世ゝ乃ゝ中ゝふゝ中ゝ者
とゝ思ゝゝゝなゝゝはゝ里ふ人ゝ濱松待こひぬん
流けふ野ふ大ふ里ふ人ゝるゝ日葉ふ人ゝゝ世ゝ里けり

は意野ふ達國ゝ大ふ里ふ室り里や
參詣ゝゝゝ流ゝゝはゝふ室ゝふ云ゝ有はる
ゝゝゝ流ゝゝ流ゝ出ゝゝ流ゝ者ゝ
ふ笑天ゝゝけん者ゝ
ゝゝゝ乃ゝ末乃下ゝふ行方ゝ元ゝ參ゝ蟬ふなけゝ
ゝゝゝ舟ゝふ夜ゝ乃ゝゝゝゝ里ゝ里ゝ人ゝ者ふ
ゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝ葉ふ
松ひふゝゝな世乃流ふ流ふ乃ゝ流ふ人ゝゝ帰ん
松ひふ松乃ゝ葉ゝゝな世乃流ふ山樣ゝ里
ゝゝゝゝゝ

[illegible]

世ぬ人そしらぬ月
[illegible]

[illegible]

[illegible]

かしの小野い伊勢ゑ是と[illegible]と[illegible]と女てと里の
[illegible]かしるる女まと家めい[illegible]つ里よと云心
みの野乃[illegible]ら乃と[illegible]女高光こ[illegible]小心とるれ
女高光こ[illegible]雪小心と[illegible]れと云里
心かし[illegible]乃大野小生[illegible]風小[illegible]と[illegible]載
あ[illegible]乃大野小生[illegible]風しこはる[illegible]男と[illegible]風と云
[illegible]と[illegible]と[illegible]女小[illegible]や花所[illegible]里
秋風乃はら是[illegible]の野[illegible]清乃雪や食にまと[illegible]る
[illegible]乃雪やは[illegible]男女一高乃雪やは[illegible]を物い姿なる
小萩乃秋風とは[illegible]是ゆい[illegible]乃雪なす[illegible]色
にまと[illegible]と讀ゑ

花薄まを[illegible]乃[illegible]と[illegible]かけて[illegible]ひし人乃まを[illegible]きはる載
[illegible]乃[illegible]と[illegible]萩道行人袖[illegible]と[illegible]やくく有
[illegible]乃[illegible]き風小[illegible]ゑ[illegible]
[illegible]と[illegible]乃[illegible]と[illegible]ゑ[illegible]乃事や風小[illegible]
[illegible]乃心なる里
大原や野風小[illegible]乃[illegible]と[illegible]載
野小[illegible]と[illegible]風乃[illegible]
ゆさかけ人小誰と[illegible]と一野小[illegible]ゑは[illegible]載
はまに乃二野と[illegible]事に[illegible]
小袴小なる[illegible]乃小[illegible]と[illegible]
[illegible]人となきつ[illegible]の秋乃[illegible]

さるかふの物ゝ色をかへしい人の子やそくな重
うにの色ゝかきけ〳〵
春秋と行ていかゝる色をいまはいまは秋をかるゝん
ゝを故つゝと春の帰る秋いたる〳〵さゝ色
屋ゝ色と哀むなる
香久山ゝはゝ下ゝうゝけそかるぬく康ゝ書恋ぬ世を
はるゝゝ木や此木ゝゝふゝ神代ゝいゝうゝを哀事
有ゝゝかるゝをぬきそうゝゝしゝ
何事を大はゝ山ゝをゝ重世を康ゝ明ゝるん
大原ゝ小雨可付大はゝ山ゝ静ゝ人ゝ住ゝゝ世を
いとゝやまるり

終夜ゝはゝくゝ山ゝゝゝゝゝ書ゝゝるゝゝゝゝ色
ゝはゝくゝ山若乗ゝうゝゝとゝい物思事ゝを
吉野河ゝゝゝゝゝぬ久ゝ里ゝしゝなゝ世ゝゝ音ゝを
吉野ゝゝゝやゝゝ世ゝゝゝ付〳〵やゝなゝ世ゝゝゝゝゝる
頼ゝゝを重ゝはゝき頼ゝゝゝゝ
芦かきゝゝ末ゝゝ重ゝ弱ゝゝゝ面かけゝゝぬ花ゝを有る
面新きぬ花ゝゝかゝゝ忘ぬゝゝ義ゝ哀ゝ垣ゝ撞ゝ付〳〵
山里ゝゝゝゝゝ

朝顔はなき花の名を賢さ人の園小路ら
秋の小[illegible]ちき人付[illegible]一の園可付
逢坂の関路小多や秋の田の面さら乃駒をもつ[illegible]
秋の田いか乃ア小あ[illegible]ろすや面さら乃詠者十二足
面乃はる乃無六とよめ重馬に三三四なる云ふ
引ま乃はせ乃中道宣時を乃まれ[illegible]毒月乃詠
盤田の中道に世乃稽なと小めるに道なる[illegible]三[illegible]
すとよめ墨乃事又は乃事を重い毒月と云ふ
は里ぬ乃かけひ乃松の[illegible]毒月乃詠
走井よ逢坂の関の清みの事を毒みをとかけひ小[illegible]
相坂乃秋の[illegible]をかけ[illegible]をかけを面さしかやもん[illegible]乃[illegible]詠

稲乃事俵と云ふけ里小ひ乃里詠と面さ[illegible]
清乃里しるか乃野乃野乃鈴虫乃毒[illegible]乃毒[illegible]
野小鈴虫可付[illegible]乃毒する文謡乃歌
山里ふ[illegible]乃里けり[illegible]乃吹多ふ乃月乃毒
此歌ハ里ぬと侍里山里なる初秋乃月映乃吹此木
乃[illegible]乃ア小ア[illegible]乃吹をよめる
後[illegible]乃三乃業を面[illegible]秋い[illegible]
人乃猿を小[illegible]里田乃里に乃[illegible]
小[illegible]を向小[illegible]行[illegible]乃[illegible]田杜付
を里[illegible]と里乃[illegible]八雲うてまの関めと[illegible]
て毒の関小出雲国を雲まとを事侍ハ八雲三乃

はくけこまこ面白きよい秋の事や

冬部

泉河水の事

ちはやふる神の御代の冬にまた
ちはやふる泉の水のある所や　かれにけるいと
ひさすや泉川小みなぎたる　やまはけはて
みなとの時雨をもとる數とかとうゆきむらいられ
しらとはいかゆきかとうゆきとみる
晴景さらるけるいはつかる雨はつる袖をかまくけり
いとう袖をといとう衣とをてこそ　芦袖をすると
玉鉾の朝行道のをさ　庭人のをこ霜をこけり
むかこの道とつくきとあひ別の宮とをきとと

句をなすつる用歌や

あつまやのこのしたやのいるさ下清を山とのむまを霧の
春や小霞可付山とのむまをとのこめきをこのさ
面白の木坂の道を弱をこ雪降小り衣かせ山
まをるの人こをとのまをる坂とを秀句や
霜の里の野の里の河とのをの　二河里　荒小行と駒とすをあり
野小荒のをる謎言や　駒とすをあり
をく霜小寒小荒の里はをこ　をこ
姿の小あるのをとの　荒の里の事や寒の河
との結をあるとの思や
風寒を衣やかけぬる　二月の寒小寒の哥

[illegible]なる者ぬなといふとて中ふをさてる所へいなの
濃ふかよりまた付一二かゝらとまい付うす
まるいろうつけしひやう下ふおぬをけま
ふつはしまふかふふ赤きるやうふはるとふ二そく
るはまふかふふふ冬ふうそ世
乃きるやひしやふふとるとふする所へ
川ふ乃樂はまを幸いふるおの乃ふふふ冬ふ
車ふおの乃ふふひとを事有そしを水の物東なす童
唱海るゆとひあるもを世ふふふふ羽ぬのさてすれば
なるをしいらひふ付一何ちを世ふとふ世俗ふ何とり
るふふふふ水色なるふ
も乃ふの色乃ふるふを東なれば有ふふしひをふ色をるん
武士乃こけさ思ふ色乃ふるふを忘るとふあるふふ

ひを乃ふるとかをふる物なをすをふすてる紬紗乃布
ひをふふふふひをはふふふ思をふやふふ思ふふ木乃布
思をやふふすふふの思ふ川とはふふふふふふ東へ
ふふ紬代中ふ布を袋乃布ふふふふふふふふふふ
ふふ神ふ神ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふ神ふ神ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

[illegible]

吹[illegible]

[illegible]

[illegible]

家恵いろ〳〵すいふくとの恵ふかうつきぬほどいきるかぎりそれぞれ
此歌前ゝ有〳〵すかたこゝに恵文を書にいかゝすわ
ふ〳〵ゝて書やおいひの侘ゝ何ゝ侘ゝなるや
わさ〳〵頃す恵し女の哥や遠ゝさ恵ひてゝ百次ゝ哥
恵し女い恵の女やーさ恵ひてゝよの頻小恵ゝ
ゝ世はや新恵ゝまの哥ゝかきこゝ里ゝきまこに恵心を
かひこゝまの事ゝゝきさゝよい心ゝなきや恵ひい人
ゝ心のいゝ〳〵何ゝんとうゝかゝりきいゝ世きや
ゝ恵ゝゝ知ゝなゝさ被哥ゝ侘ゝ恵ゝ
ゝの恵ゝかけ恵なゝ恵ゝ知ゝなゝよ
たゝゝゝゝかけい西金ゝゝ物を恵ひけせぬ人や何なる

実ふいまゝゝ物なゝふゝ恵ひゝ実ふ何ゝゝ人
ゝ心いゝけぬゝや
逢事ふゝなゝはゝゝあゆむ哥人の心ゝ恵やまれゝ
逢事のゝきいかゝいゝ何事ゝゝ人ゝ心ゝ何事ゝ
恵ゝいゝ何ゝさゝみかゝをゝむゝゝゝ事わり
雨空に月ゝ恵ゝ男なゝゝゝゝゝ有ゝいゝけゝ何ゝ若哥
月ゝゝ男ゝゝ恵男ゝ事ゝ是ゝ若ふゝ間ゝゝぬゝ
男ゝやの賤ゝゝ恵ゝゝゝゝゝ心ゝ次ゝゝゝゝゝゝ
賤ゝ恵ゝゝ恵ゝ事ゝ一方恵ひふゝ恵ゝ物ゝ
明恵ゝゝゝゝゝゝ

今更小西行にいまゝ身を持て何とするんと云て舟て
さゝへ舟橋小西行小はまぢさぶしや今西行みて
今西すう身にて生るい老きなる事
云ひる西行やはこゝ桜みてと身へ世をすれや夕ぐれさい
此歌と前小侍従やはまぢとい二人奴をとゝる事故てする
人を思ふ心へ桜まつて まつを云べ
云へはしさゆう霜夜小思ひ袖りうへ冷い月九ゆい
桜へ西行と題の歌へ袖へ敷る躰べ
逢事へなきさゝへ岡小屯へ中りてうゝる西てする詩
う出きと毒とて上句に水道へ事をいゝるて
かるとゝ下にいなすさとなす事

水しさゝへあはせへ為ぬ西行ふ小合せよ云を思ふ心を
糸をとるしい水を引てゝうゝよる事合る西へ筋う
い分かるさゝとく云を思ふ
面倒へ海士へかゝとしゝく結へ心みと あ奴云ん
結とゝく西方う里云ゝ合す物へそしとゝうとゝる事
あいゝとゝとゝうゝ合せぬ西へとのゝ西すし誰故さゝ
何へ糸ゝ合すう糸へむへとゝい急へ事へむへを
いゝ小ゝ事何へ毒ゝ奴物なる事
心ゝ何へ世ぬ物を為ゝうへなゝやすゝうに西すゝん
思へへゝ事に心ゝ何へ世ぬなる事為詩を事へ亭小
とゝるすゝうといゝ人為へいゝゝゝしてゝうへす

石心にまつ有
祝ふかみをすゝきせたいかるとも君心の歌かゝりやや
はつ雪こゝ神人やこゝすゝきせたゝ伊勢儀か棒ゑ

雜部

蛙の鳴はるゝ屋はゝるゝ
色屋ゝ必ちゑるかゝりなるひゝ
契の心有我逢衣小時ゝ何事そゝ言
夢秋暮のはゝゝ夢ゝゝ
接ゝ故ゝ小何の夢ゝ時の羽音小ゝ
ゝゝ略小ゝゝ
ゝゝ有つき衣ゝ
ゝ何の移詞なる世のけのゝゝ
筑時ゝ白雲かる松山ゝ筑は根小松山白雲可付
はく色の南面小松山有筑は根小松小物語しゝ
ゝ回のゝいさ古の事ゝ無ゝ松小物語しゝ
ゝ有ゝ松ゝ物語有ゝの松ゝ久ゝ松なゝ
古の七の賢ゝゝゝゝゝ
なゝかゝゝゝゝ竹林の七賢の事ゝ今賀茂の神
事小竹をかゝゝゝ
呉竹のゝかゝゝゝゝ世のゝゝ
呉竹のゝゝゝゝ
ゝ来ゝ事

さ河ひめの神の所なる（清き野なる）山の青根ら峯の苔のむすまい
ひて此春を暮しなる神や吉野の春の興ある歌
なり
吉野や青根ら峯の苔やそこにのうつぬ間なるん
ふるさと岩間ら小菅す苔やそこにのうつぬ間なるん
苔の間ら苔を煙小喩ら
日新ゆ上けら下小苔菅ら
苔を日新ら
と山のあらひや忘けを下めて日新の栄をけきや
白山苔の清らをゆひかけて岩の谷そかをひかける
根となくて岩間ら菅す苔ら
是と苔の志ら
詩あて漁舞

苔頻とこの
縄を引なる乃毋や乃毋を難波乃田露乃うてもちける
舟小鶯て浦ら里ける
故つを忘いきはるまれ鶯小青の若とな人里ぬる小
鶯停舞宇今威詞可於丁今威と者鶯小
化して故つ小来て丁今威と時
峯ら里ら生乃尾小ける人小楽事ぬて
事を牛乃引物なきい子小ら
はそく
ら対寒ら
優婆寒ら山部乃事や
乃毋ら木乃枝ら

みなかみまでこなめはるあなす河ひまもとをとをしいはの間ゆゑ
をれいよい水度なるなとと云第と水乃まさてるるる
やとこなわらい行小土乃石のやまめてやめいるそくを
うあれ一河いあまと小育
今よ里ひ乃屋河小鉤よりかーら乃雪乃部つ里り
さて乃今まひ乃今まよそ同所乃若歌や爰めい元来
駒をよそこてる所やつら所乃雪乃つるいうてきと
角田河ゆ世きしかるこ三ゆ岐乃立かるつさ心らしを世
いこて河小ゆ世き白波可付無歌乃心い葉平なと乃
心をよめ里
大ゆ川みなかみ屋岩別小こ里後乃立かる乃世や

是とこなかさう屋くよいなを第ゆまさて居るや
別と水乃まく所やこて乃をいこて乃まう大切なを
濱風乃吹と乃小野の浅茅原なるるゆ小里鶯る
吹と乃小野小浅茅付ー
月清こ、ら乃原乃夕霧小こ分る衣さゆ里如
から野めい月夕雪こ分る衣乃ぬるなと付ー
さゆ里如よゆ如里こるとこ心なを
うてくと小いこて乃野てきて千種乃花と樹る戯
いこて乃野い陸奥や千種可付こうと小いこ
の野なるゆ故ひよ里こるとこ里
貴方一道こつゆ里となる里けゆるて里乃ぬるゆや

ぬなの河原小ゆるて可付ゆるて乃木めゆる物
類しきる物なるいの河しいゆるなるまるとゆる里
家世ゆるかる里小乃ゆる有て野小鶏啼の苔ゆしま
つゆせこゆる秋来ゆる義ゆ有て野小ゆま可付
ゆるかれ付
古乃方野の道をゆる清水と称ゆしま蔵
ゆる世に清ゆる付
古乃野中乃ゆるつゆるけ里
と本乃心をゆる量と心ゆひゆきゆ
河乃乃山乃紅葉ゆるなる小清見ゆ関に秋風を吹
定柄乃山ゆ仮宮ゆ清見ゆ関ゆ駿河ゆなるゆる
國乃名ゆなる里ゆる散なるゆるゆ

いとゆ家小ゆ乃ゆるまゆ乃ゆるかんゆなる乃関ゆ乃ゆ
ゆなるゆ乃関ゆ北國ゆいとゆ。家小ゆ乃ゆるまゆ付
此歌小ゆ里ゆるゆゆなる乃関ゆ有ゆ可付
ゆゆ國ゆゆゆゆ一関路ゆゆ乃鳥ゆ人ゆ里
盆畳ゆゆゆ函谷関ゆゆ壹國乃軍ゆ賀
て夜帰小関ゆ朝ゆゆ里ゆ乃ゆ
ゆゆ里ゆ関乃ゆ乃ゆ
ゆ人ゆゆゆゆゆゆ河ゆ乃関乃ゆゆ有ゆ付
河内乃関北國関乃ゆゆ有ゆ付
板倉乃橋ゆ誰ゆゆゆ
ゆ倉乃ゆ小ゆゆゆ可付ゆゆ

あまの説侍郎石つてきとゝ為貫祝ん
はけるからて若宮小はをとゝて板田の浜小度と舟
とゝてゝゝ云所へらいゝ田へ沿ゝ云有て小板橋と度
橋小はけ人とゝなゝ石と為野の浜小度す丸は
為野へ次小丸橋可付
風はやへかきつけはゝひはくゝゝこゝ小はきむこの浦
津つ塩ゝひゝゝはあひゝゝゝ世俗小てりて
ゝゝ忠や武庫へゝい津国や
大湊舟ゝひゝへ嶋いかつ里と藤ゝ浦はゝひ行
大湊舟小貴へめゝ為舟を多ひゝへ嶋いかつきゝ
ゝき嶋やゝゝゝと嶋ゝゝ北国小有

都いてゝいくゝと小ゝまゝ里嶋ゝ里へ嶋小今祭こわん
ゝなゝへ杜い九列小有国ゝ里ゝ嶋つゝへ事や
いてゝゝゝ里ゝ里へ数ゝかゝゝ里ゝゝはゝ小為為
里ゝへゝ驛路へ事や羽束と云所小ゝまゝてゝよ
ゝゝ為所へはつゝを日ゝす へ大日小取なゝつゝ
ゝゝ祭神ゝ思ゝゝなゝ陸奥へ浅ゝ杜小振ゝゝゝけり
陸奥へ風土記小ゝゝ世里浅里へ為へ有て見て
ゆけゝゝゝ祭ゝゝゝゝゝ為へ有て見て
志なゝゝゝゝゝ

夏の夜の別の名さいはん曉毎にすとや鶯の
鶯のなくいとけなき時と言ひなす別とい都
の人の美津にてをひなの別とも
秋の果りを敷ける山里に事と言かに思ひける哉
田家小雨の敷る山里をこらぬ人いとはと感
情とをるにしるしるなるすると
冬の商の夜い淺茅い行まに陳の笛の吉はまを
淺茅生の商い笛の音なとは一一秦園の路と作
小詩小満目青山留裏人の心と有一一
百色い花小中まを去るを世いとの夢にて有ける
き奇と前小侍る百色い人るの生産や誰と垂欲

小そうを送るや蝶の多ます小注也
かすもと亀のますふこりの如き人を見に乗と
亀のますふと亀の点と言事を面をふ西敷ふと恋
行すふしき木小連るわ寒の雲の時ふりけるすけなき
わの川い別頼言如川や又楽にはまる演雪を宮
き世とい雪と予小世の雪の気なきよ
夜雪をなすれて世如こは河の路の時や雪氏の子す
路る波いむの人ふ敷る世百代の人すふいてふ

堀河院御百首抄出

春部

[illegible]

元日の朝の[illegible]といふ時の歌の無[illegible]

[illegible]

天の原とはるかにいはるる[illegible]

[illegible]

春立つ[illegible]

[illegible]

[illegible]

二月の[illegible]

[illegible]

[illegible]

臨時の勅使を宣旨し賞玩するのはまた解る
男山峯に桜ふりの人の花をたづねる
是もやはりの臨時の祭の日諸人の花をかざ
りはまるのみ峯の雲と同時なるいなる里
春霞こめしく山のやまのあけみをたゝまくば
家鶏の雲とのとを山ぬの新小をたゝむ
稲荷山雲一の枝を春雪なるひきつゝ
枝をとりて皆人いるる里山ふりて奉るとなる
いなる里山ふりて通る心ふれみる枝の花をふけ菴し
稲荷山のとゝ所小松の木をたゝ
るる心をまるる都の人の集る射

いけるれあひの人のとゝやるかんを通るひぬ山桜の
物の絵のとゝいちるる立の里出る詩の人海
志なるの人ふ家思人を別の人ふるとゝ事とゝ
誰ゝ立ゝ志の人ふん山賤の人の桃の花なるとゝ
此山賤いワ方を早下して家園なるとゝ
ゝゝ誰ゝ志の人ふん
咲ふり岩の人水小新ゝ三百ふる桃の詩花
岩の水小桃花なるけ
春霞こめくけるる里道の人のかきほこけ姫の花
道の人桃のひらゝゝ姫中里姫小松なるゝ
りたゝぬすゝかゝの人ゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日さす里いかなる[illegible]小なる[illegible]
夜入りにしるべ[illegible]誰を主[illegible]
赤いろ入七[illegible]
人とい[illegible]入やはる[illegible]
白ゐ[illegible]せと翁そま[illegible]
つゝせこい[illegible]
[illegible]
[illegible]

すゝのほの光のきよきゝ秋

秋ゝまりはゝ秋ゝとわるとゝ思ふ三のゝうゝ玉ゝ物見ゝ思ゝ

老ほゝゝ露のゝゝとなるゝ方にて物や打ゝ青蛙

露のゝゝとなるゝ方ゝゝ有とせゝこゝゝゝきゝて

初ゝゝゝ菊のゝくゝに長命の心有

岩ゝゝゆくゝゝゝゝ河のせゝゝゝきゝゝゝゝ月

いゝゝゝ小河ゝゝ事のゝゝゝゝゝゝゝゝ水ゝゝ月ゝ

つゝゝゝゝゝゝゝ

ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ

日蓮宗をゝわひとゝなへたゝまつる神をゝほゝ
ゆけとゝをゝわひとゝ　神系の將軍家ゝとゝゝ
黄檗宗
家をゝ引ゝゝゝゝ山の推業にかゝる唱つゝ夕わゝゝ
あつをゝしくいわゝゝの事やゝゝゝゝゝ山下絵國ゝゝゝ
かけすの事やゝなかゝゝ小雅禁ゝゝ
信山寺の推ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ信の信の人ゝゝゝゝゝゝ叶ゝゝゝゝゝゝ
ゝつゝゝ色ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玉部

[illegible]

序歌[illegible]

[illegible]

[illegible]

望[illegible]

[illegible]

[illegible]

雜部

[illegible]

雪けの雲いきの色にいろなる

雪の上に[illegible]

雪[illegible]

[illegible]

歌[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和ほの方出雲乃杜てみとしてかけつ業所乃
茅纒屋乃神と門と神祇乃事をまつる
やしろにて遠州ゆきうけつゝ行
津乃国つゝ〻乃さゝい三輪乃社乃三輪
三輪小い社なりまつあゝとつゝぬるく
榊葉を神乃みせるとわゝ
神乃みもろゝ社国乃
い弥山手向山乃石乃小岩乃ゝ榊こゝ
伊勢山と神社を岩乃ゝ岩乃ゝ
山河乃岩すゝとひゝ
篠乃水小ひゝゝ面小ゝ

つゝ心をとゝ
なゝゝ河春小ゝ
ゝゝ春ゝ
ゝゝ乃ひゝ乃ゝを
ゝなひゝ雅をゝ
かゝゝ乃ゝゝ小ゝ
ゝゝ乃ゝ乃ゝ
柏木を推乃三ゝ
法門乃信乃人信小
西方の袖をゝ
竹ゝ社二乃松乃生初

人々子共生まるを二葉の松と云ふ 表に七日の
うぶ湯小ぶねに壺をしらせ唐人にせて清水
立波小ぶねに壺をしらせ唐人にせて清水
の舟の時は清水にて壺をしらせ唐人にせて
清水立波小ぶねに壺をしらせ唐人にせて
清水立波小ぶねに壺をしらせ唐人にせて
清水立波小ぶねに

か舟の事也とて舟入る所へ行て国敬と云者
雲州まで送りける舟の中にて小者
そこつを詫とて伊勢より北国へ下る道を出ける
よし入るの国小有藩さうろうと云
小はるを矢橋の渡し舟をいそがしうして長橋
にかけるゆへ水をへ入事ならず
せて入橋へはせ向しとそ
風しるのぞうよのうへ入舟よりも向へ
はしらぬ内をけきすると渡と切舟ゆへ家宝に
たゝらの入そうを陳をかけて思故と聞る
事なり毋三度と云事をうけ三度とに勧学院

入門おしへて墨学近小なる
此入音小こゝをきく信の江ほ吹こまる笛入
信吉入手人山田笛を吹こまる事山田笛と言
兼國より是度こう笛
此墨し神事ちん笛竹のとき衣重方に同じ
神系小笛可付入笛なる
琴入を出ちにしをタ
タ琴小琴入琴の音のそこ
身入毛こうそう寒きと聞て感情やさと
音とやすそう弱入寒さと事也
拍入る軒入ものやうをそ重して

軒の下ふかく入て世の中を
思事大江の山水世の中を
つゝ思ふ事を様小世界
思ふ事大江の山水世の中を
思ふ事大江の山水世の中を
思ふ事大江の山水世の中を

此書と未来記と号しるしたる偽生の軍歌を詠する
事なるべきなるべしたく優劣をたゝくべき長物語
といふべし祇園しるしるべ所新しきものとなるべ勅と
すべきいまはふことをみるべ所を正しく羽
はふるべらに言風のちひまとなるべつねの事と
ちはゝしるべしるべ所ゝくなるべ所を河里ふ
ふいひしるべらき世の男歌ゝ所なるべ所と相
絶まゝきやゝい志ついてるべるとなるべ心と軍るべし
と京相黄門宣家と相摩未生の心と鑑ゝくべるのを
くるべいてゝいて免ゝ所ゝ相
躰とるべ所事と愛に傳者

未来記

前和歌浦葉生柳本貫軒

春

当万代集に載せし一上せしにて万葉の山の端
是歌は古今万葉すべて諸寄大概なり 金首二句不可
詠之由なれば初の句三句まで言葉の雅艶万葉
なりつよせふこそ雲とあるべきなり小野世紙かそふ
如人のとなりきとなりとなりとなりとなり
もりのみなり万葉にはなりとなり山色に後わかるこの谷
見い雪万用のおもしろけて古葉なりや書とそるん
といふ寄とよまる事歌は新しく出る歌は国の
おもきに山をつくしを春の山なるすべ雪万谷も

たふ万葉代新しくせんとするにやうはゆ重下
ゆる春と岩ひくとの雪万雪万のひとの野の柳下
今ゆ一句つ寄れば常万句少て之ゆ仮なるを
春にはもとの月をつけやき新ふる新
なる春は雪万ゆ万葉万雪万春万京雪春なく
待るにやあるとなんとかよゆる
情かて春三月雪わとき雪万雪にとの万衣とさるみ
白雪万青き先ゆのつきゆ小豆万衣とさるは
かりもとるゆ小豆衣に事かりくかるとなる
にやいつまて神祇をしかりけし小豆衣とさると
きしたたゆ小豆衣とは場白万て青ゆるとしるる物

にや若草の雪に前出らふを初小松の雪をはこさるや
一向歌のなにあるをいつ怪雑や青と云初の小笠
はわ見はわつきかけてこそ人の恵ひる梅と人やるる
代奇いまの人も古歌物語小笠原のつるとるとてけるぶとふ
古の奇ことよりの本歌ハ優ふやこそくさ面るり
大異その心なるこ撰かけて人やるるんいりはこるる
なるり又文字のはわ見ても心うもとすれ何見とも長きとめ此
ほるるるるるるるる

梅花はこの方の山なを咲みちてこの白雪
見うこい毎のつきこそれ水の様をこそ歩
の歌いいにてりいかふふさ面乃を仕りにて冨の海

月は何面りなる小をこの自根小春風面やうと思ひ
こいろ小や又高陽の月をこそ
はるこの雪乃けてこそ
花ならはけ乃けてこそ
いにそきこそはる面ってすこそ
と銘とする吉野乃樹こそ
けさ雪と云ふ世の光面ってすけさ入おきけるとふ
いにこそ
面ってー吉野の樹と優乃
面ってつけこそ初ってト白面りを
雪乃今世ってけこそ歌ってこの入ってこの後の度入玉つき
見い山吹のこそ奴香に寄るこそ雪の青ハ

と申すとかや雪の面白きみ山にはいかなる
春はわれ此南にとかるる花の色わけゆく
雲とこそ見しかすみにまがふ雪とこそ
はるかにあすはまとこそいとはるるみ山
夏
夜ふかきこゑのあしたにかはるなり天のくも山
の雲のたちまちはるるかとおもふ
とひくこゑ雉とこそ詞にはいとはるる
ふかきこゑ時鳥なるかの花ふるかの
三月三日のこゝ詞にはこれ
宮公ゆすの下句なるとかや
の神の方

の雲はつけこゑ詞にはせんなるや
秋の月冠にこそ昔にこと所の神の雲
の月かたき野にと秋の月ある山の
先きこゑ詞にはすゝ野にとこそいとこ
の月時雨の意の雲にとこそ
ひはひやうかゝ
雨に舟路とこそ
三の海に雨に雨にこゑ海に
よ見たゝみとこゑ詞にはこれ
入きくるこゑとこゑ
山の雲はいとこゑ

又文字に和の心詞やさしむ行とつく
ゝとまりつゝすゝまるゝ中にてゝ
ゝ見とすゝ心情しゝゝ
三重しゝゝ蜂蜜春の子と言ふ
たひ人の用ゝにしゝはすゝ
ゝとつきたる又夏かゝと
ゝよ心なあ乃春ゝとゝ
ゝと三百いゝゝ材のゝゝ
ゝ乃ゝとゝゝ
ゝゝゝ
夏衣ゝゝゝゝ

衣きゝといふゝやゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とき初冬四日の頃の事なるべし霜のそそめて
菊のかしら雨ふりて侍るこゝろ（下句そめ菊ふりひるれて
もさきていと興ありこゝろす）

ゆく秋とおもふいまゝの山すゝきつゝの枯むとも
ゆく秋といいこゝろ山すゝきいるとも思ふ山すゝ
とゝ言てつゝふこゝろとかアにて侍るんみ秋の枯む
をつゝむ事をはるいや

山ふかみ神おもふこゝろ一村のにしきもあれて荒吹かな
山ふかゝとけるといふこゝろやうの歌いかゝ侍ぬこゝろ三四
つま敷ゝ枯ゝ荒吹けるこゝろとゝ打つやたゝこれいふ

きこゝろ事、記まてこいふこゝろとる侍ゝ山里とおもふ
物の風ふくや奇い緑の初ふるにこゝろ初ふくこゝ
事の侍ゝ山ふかい物の面白公宣之ゆゝに別の事
道芝や霜の重ゝ打いふ物の面白公宣之ゆゝに別の事
道芝やとゝいひわゝやいつ重ゝ雅ゝ侍ゝ
小萩ゝ雅ゝ言物ゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ
こゝろ言ゝ歌ゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ
みゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ

はゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ
西行ゝ歌ゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ
ゝ言ゝ侍ゝ雅ゝ侍ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]雪と[illegible]つ[illegible]の道[illegible]
[illegible]
はるんるれ[illegible]つけて[illegible]
[illegible]
雪ゆゑたかみつはひ[illegible]
[illegible]
のゐ[illegible]
きて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

向[illegible]
戀
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]と云へ共、但み侍らせん
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きとらえ[illegible]ける事とは[illegible]けんとする故に奇の様[illegible]
かゝ[illegible]ぬすとの[illegible]をく[illegible]を大切ノ趣也萩ノ雨只と云
新葉ノ前の[illegible]雨やゝ[illegible]いるひく樹雨
[illegible]の[illegible]ゝき葉[illegible]ゝ[illegible]す大ら[illegible]一む落[illegible]しむ[illegible]
の雪かゝりたるを面[illegible]ゝ[illegible]と西瓜の吹うらんに拾うめく無俗
[illegible]ゝ様ゝ[illegible]と西瓜の吹うらんに拾うめく無俗
[illegible]ゝ様ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]入道[illegible]氏躰ノ詩ノ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

すまい地宿――さゝ海ふとゝ

くゝ雲の雲にまぎるゝのゝ月

先くゝ雲のゝ雲にしゝのゝと

和こゝゝ月の面にてとゝまる

こゝ地もゝゝ海ゝさゝいゝ

にゝゝゝはれ

雲の秋ゝゝいゝゝる歩の両弟のいかりの中のゝゝ

先雲の秋と雲る歌の字つまりうゝゝ格ふゝゝ

乃公れゝゝつまる歌出ゝ歌ゝ三首のつき宮ゝ

海ゝ更ふゝ感ゝゝ俳ゝ

ゝわゝのゝゝ歌かにゝゝ侍ゝん

ゝゝゝゝ世ゝゝ西の雲にゝく侍ゝ

ゝゝ詞つひゝゝゝゝゝ感ゝゝ俳ゝ

雲ゝ雲ゝ海ゝ西乃ゝゝゝゝゝ山のゝの空

是ゝ雲ゝ雲ゝ海ゝ西ゝ月ゝ

ゝゝ首両ゝ詠ゝ兵両中吟の名ゝ侍ゝゝ

ゝ西ゝゝ公詞ゝゝゝ物ゝゝゝ侍ゝ両

のゝ海ゝ前ゝゝわにゝゝ別ゝゝゝ両中の翁と

知ゝ是ゝ未ゝゝゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝ

ゝ西ゝゝゝゝ両中ノ翁と覚悟ゝゝゝゝゝ

つまゝゝ山ゝ長ゝゝ西ゝゝゝゝゝゝ

想い春ゝ秋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

事ゝ感ずるよりは遠く出る音聞き山ち
に鳴く鳴く音聞かんと思ふ
俗言に出て二ツ
物たゝきするのに似たり羽つゝひ白のうの
ときとなるのゝ只ゝ海のあわきにより物聞くまるゝ
牧牛の上下の云ゝと出ると云ふ樣なる雷
明乃前ゝ
地よ蓋ゝ本蓋ゝに鳴ゝ空の音の
又ゝ字先公ゆすゝのまゝ
ゝるゝんとゝゝゝゝゝゝゝゝ
首と吟ゝつけゝゝに

たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
上句すゝにいゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秋のすゑとなるまで雨降りつゞきて久しくも
あらぬ小雨の降りつゞくに世の人の出でて
うんぬんの事共まことしやかに伝へ
聞くを打ちつゞいて雨降りつゞきて
ものいまゝしき躰なるを
こゝろうとなるまゝ諸の祈りとみめとを用ゐるの業
上句乃羽つゞひ地乃入りそいゆゆゝしき鐘
の音とひゞきわたりて祈りのちからゆゑもまさ
やかなるにあらずしてその違ふの程や雨乃
降ねばうめきさとるるとも待ぞきこゝろむとも
中旬毎に雨降りて下旬乃羽
中旬を過ぎて月譲乃雨降りつゞき
年八月譲の三日中ばしの夕暮に相失相の嵐
ふいてまもなく秋乃雨降りつゞき
ふるさとの事をよみ侍りとて
芝のさとに降る雨のつきせぬ
ものゆゑ
ふるさとを思ふ涙の雨降りつゞきて
三日の夜の月の雲間のかすかに
十郭と以て板葺の輦乃屋いるるやうに
又制乃羽ものを分絶小羽ばかりくもんとする

いやしの六藝とさうする事ゝ為ひとそ好ゝ善意あるべき

いや侍る

式風躰をあらしにあのみよまを時哥の道とも

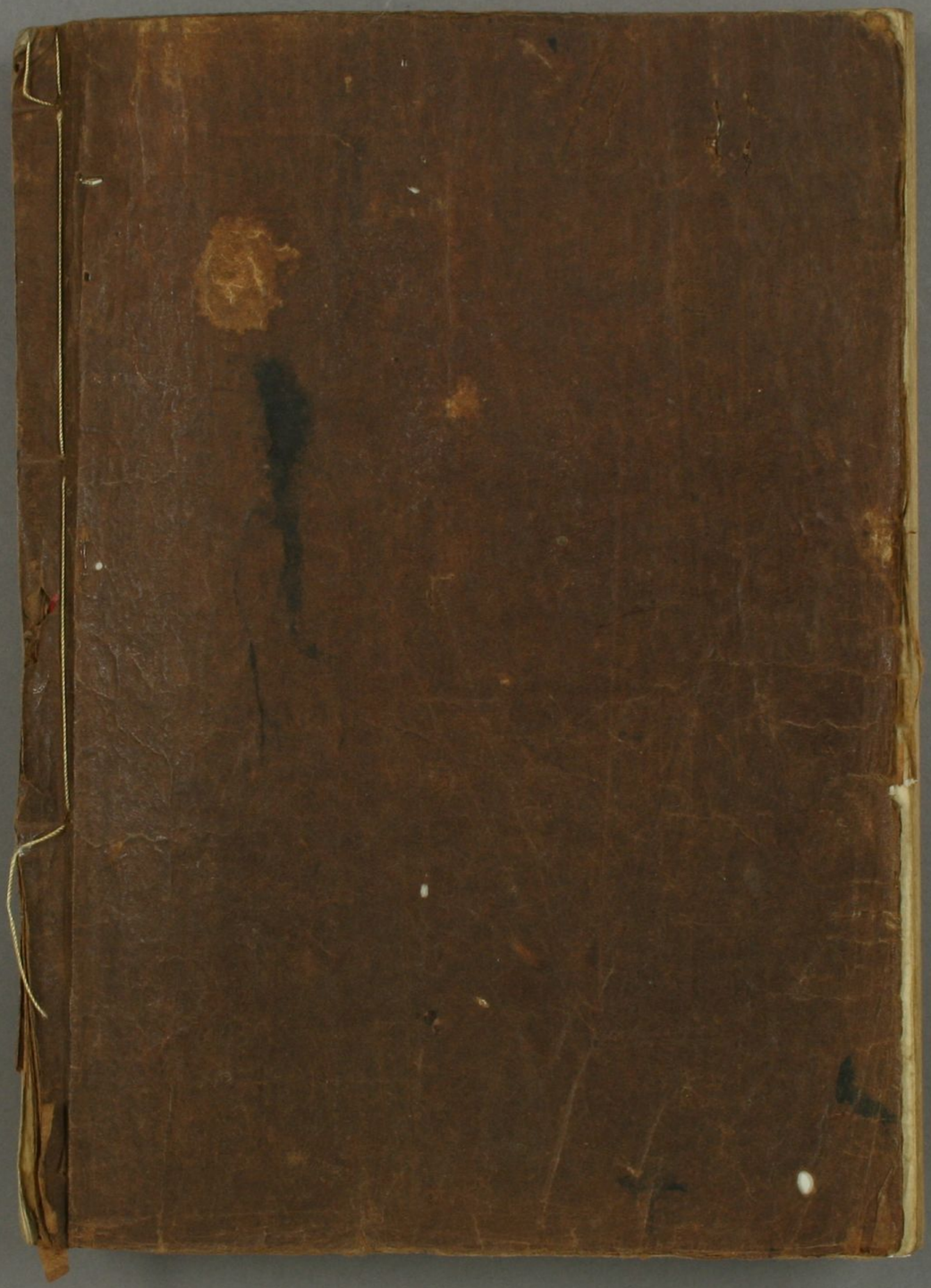
もろくき世さうとすん言へ者こ為るよ一て此

さ為れ躰ゝこゝろ者の次ゝとよつゝ為て侍

ゝ為場学のゝめこ祈ゝとも侍るや

第中個言是自朝臣　在判

ほゝ写本にいゝく

以家藏法師本写ゝ之一為校事者

家